

万象 平成十四年十一月十三日第三種郵便物認可
令和八年六月一日発行（毎月一回一日発行）
第二十五卷 第三号（通卷二九一号）

万象

B A N S Y O

六月号

2026. 6



六月の句

海道に青嶺寄せあふ記紀の島

内海良太

故内海良太名啓主宰の句集名となった『青嶺』に、対馬四句と前書のある一句です。句集のあとがきに、この句集には「その土地の歴史的な関心や人文地理学的な好奇心から発せられた作品が多い」と記しているように、旧対馬藩の宗家文書を調べに何度も渡った対馬への船上からの眺望の句です。

対馬は、『古事記』に最初に生まれた島々として「津島」、「日本書紀」の国生みの神話の中に「対馬島」として出てくる記紀の島です。朝鮮半島と九州に挟まれ、東水道と西水道に囲まれた対馬。さほど高くない矢立山系の嶺々が青く横たわる情景がくつきり描かれた句です。

令和八年

六月号

万象

BANSYO

各々の木に
各々の影
木は
しずかな
ほのお

(八木重吉「静かな 焰」『秋の瞳』所収)

万 象

令和8年6月号

主宰作品 紫木蓮 江見悦子 4

万象の窓^⑤ 寛永寺の双龍 江見悦子 5

名誉顧問作品 春の雷 小林愛子 6

風音集

中村千久・福島せいぎ・柳澤宗正・中條睦子
松原智津子・亀田やす子・沢辺たけし・吉中愛子
榎本文代・神田美穂子・井村和子・前田貴美子

風音散歩^④ (六月号) 小林愛子 10

同人作品

江見悦子選 11

同人作品の佳句 江見悦子選 31

同人会だより 斎藤恒子さんの思い出 久留島規子 32

4月の「万象」オンライン同人句会高句句

俳句カレンダー掲載句自註 あをあをと鮎の句ひの家灯す (六月) 中條睦子 33

珈琲ぶれいく^{⑦③} 33

佳句佳句しかじか 同人作品鑑賞 (四月号) 亀田やす子 34

宮沢賢治と行く 大内マキ子 36

阿波の春 平岡功 37

同人特別作品

特別作品評（四月号）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・荻野加壽子 38

私のこの一句・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・久保村淑子・島野 ひさ・三屋 英俊・桔梗 純 39

続・風のしをり^{③〇} 子規の写生論の展開（七） 高木良多 編集部 40

万葉の抒情^{③④} 『万葉集』にたずねる抒情の源流^{③④} 橋本 清 41

万象ノオト「自転車」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・高田みや子・永田 公香・平子 甲奈
松井 宣夫・柳澤 宗正・松浦 陵保 42

巻頭作家（五月号）プロフィール 高山ひさ子（那珂川） 宮田千恵子 44

万象作品

江見悦子選・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 45

北から南から 兼六園周辺（金沢）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・中條 睦子 55

万象作品の佳句・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・江見 悦子 56

新中央句会報（3月通信句会）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 58

「万象」句会一覧・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 60

ルビーの小函（六月号）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・編集部・校正担当 63

東西南北・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 64

紫木蓮

江見悦子

(主宰)

祝「梅檀」二十五周年 二句

は
ら
か
ら
の
二
十
五
年
や
楠
若
葉

青
空
の
四
方
に
弾
け
棟
の
実

さ
ん
ざ
め
く
朝
日
に
沙
羅
の
芽
立
ち
か
な

新
し
き
眼
鏡
の
軽
し
四
月
来
る

迎
へ
待
つ
夫
に
く
ぬ
ぎ
の
花
こ
ぼ
れ

家
こ
ぼ
つ
芥
の
崩
れ
著
莪
の
花

と
の
ぐ
も
る
空
支
へ
を
り
紫
木
蓮

寛永寺の双龍

江 見 悦 子

4月も半ばとなり、こちら東京ではすっかり花が散り若葉の美しい季節となりました。今年の花見は、3月下旬の上野の吟行会を皮切りに、マンションの桜並木、井の頭公園の桜と、もっぱら都内で楽しみました。その中で上野に行った時の話をしたいと思います。

都内有数の桜の名所として知られる上野の山が脚光を浴びたのは江戸時代のこと。この地が江戸城の鬼門に当たることから東叡山寛永寺が建てられ、江戸庶民の遊樂の場として桜が植えられました。境内は、現在の上野公園、べてを含む30万坪超の広大さだったそうです。昨年は寛永寺創建四百周年を数え、その記念として根本中堂の天井に2頭の龍が描かれました。この龍を是非とも見たいと先ず足を運びました。

龍の天井絵は京都の妙心寺（狩野探幽）や天龍寺（加山又造）等にもありますが、今回ほど時間を懸けて見たのは初めて。56畳の中陣いっぱいに阿龍と吽龍の2頭の龍がくねりからまり、衆生を見下ろしている八方にらみの目に射抜かれるようでした。手塚雄二画伯によって制作され「叡嶽双龍」と名付けられたこの絵は、昨年9月の画龍点睛開眼法要で龍に魂が籠められて完成しました。天井を仰いで1時間も時を過ごしたでしょうか、何とか句にしたいと思いました。

こんな具合に、試作してみました。

①阿龍の目の強さを眼目に庭の満開の桜を取合せる。 ↓花の寺阿龍の晴にみつめらる

眼前の「物」が存在しますが、中8になってしまつてよろしくありませんね。

②「竜天に登る」（春分の時期に竜が天に昇つて雲を起こし雨を降らせるといふ、中国の伝説に由来する季語）を使つてみる。 ↓寛永寺の天井抜けて竜天に 天井が「物」です。

③自由に「虚」に遊んでみる。 ↓天井の双龍花に遊ばんや

日常を離れて久しぶりに作句のモチーフに出合うことができ、①から③まで推敲の愉しさを十分に味わう時間でした。

春の雷

小林 愛子

(名替顧問)

花蛇のホバリングダンス一斉に
暖かし庭のおどろに日の差して
殺人に始まるドラマ日の永し
半分は明日に取り置く筍飯
春の闇あの家この家人消えて
小雨なか訪問ケアや桜餅
春雷のぐわらぐわらと桜終はりたる

花 浄 土

中村 千久
(編集人)

春 雨

柳澤 宗正
(顧問)

悼 山口素基さん

友逝くや吉野の花のふる里へ
花びらの斯くほど舞ふや花浄土
乱舞てふことは知らざり春の蝶
上枝なほ光惜しむや夕桜
花の雨伝言板に「帰ります!」
陽炎の野を踏んまへて太極拳

春 の 水

福島せいぎ
(顧問)

山 笑 ふ

中條睦子
(同人会会長)

青竹の籜をたばしる春の水
戦災の瓦出でたり蜜柑植う
引き潮の磯とびとびに磯菜摘む
釣竿を磨く教師の春休み
入学の子がグローブを見せにくる
跡取りに生まれし定め葱坊主

日蓮像の見据うる先や遠霞
花人の胸に熟寝の赤子かな
シドモアの墓地に咲き継ぐ桜かな
※シドモア……アメリカ人著作家
朧夜や月裏よぎる宇宙船
花過ぎの静まる丘や遠汽笛
春雨や巡る三越鳩居堂
雪解の苔あをあと綾子句碑
春愁や止まりしままの腕時計
桜どき術後の体伏せしまま
花冷や病魔は不意に襲ひ来る
この町の燕となりて空を統べ
天辺にパゴダがひかり山笑ふ

残る鴨

松原智津子

(北海道)

遠目にもほのぼの白し北辛夷
歩数計無視の散歩や落雲雀
露味噌の朝餉に不満なきひと日
初鎌險無き目の青さかな
赤レンガ庁舎の池に残る鴨

豆の花

亀田やす子

(栃木)

山茱萸の花やたばしる沢の水
生命線花のひとひら受けにけり
軒先の鉢にふつくら豆の花
うすばかげろふ肉厚の葉裏より
桜吹雪鉄剣出でし古墳山

芽吹き

沢辺たけし

(千葉)

魚水に上り溪谷に猿の声
鈍色に細波尖る霾ぐもり
静けさや芽吹き音は森に満ち
初桜地蔵紅さす浄閑寺
囀は雲への語り三十三才

チューリップ

吉中愛子

(東京)

三角の瓦小脇に屋根替師
浸染のブリキの馬穴つくしんぼ
紙袋大きく振つて一年生
紅刷いて散り際の白チューリップ
春荒や川波の秀に泥はじけ

トロンボーン

榎本文代

(神奈川)

薔薇芽吹く海の光のとどく庭
トロンボーン伸ばして引いて春うらら
囀やひつくり返す玩具箱
春寒し鮫の卵に紅はしり
風呂敷のてふてふ結び桃の花

おぼろ夜

神田美穂子

(静岡)

清明や竹の穂先に風見えて
園庭にチヨークの線路風光る
おぼろ夜ややうやう一句紡ぎだし
大試験リュックの中ににぎり飯
まだ固き制服の襟一年生

花の下

井村和子

(石川)

田起しの音遠近に千枚田
椿落つ川の流れに水笑くば
遠足の子等輪をなして鳩に豆
花の下ベンチに二人手話はづむ
呼び鈴に本伏せて立つ花の昼

春の真ん中

前田貴美子

(沖縄)

ふらここや麒麟の空のひと欠片
河馬のあくび待ちゐる春の真ん中に
河馬の耳くるくる春風を回す
ライオンへ近づいてゆく春シヨール
哲学やゴリラ浮遊の春の雲

風音散歩 ④③ (六月号)

小林愛子

引き潮の磯とびとびに磯菜摘む 福島せいぎ

「磯」とは海、潮などの水際、特に石や岩の多いところを指す。句は「引き潮の磯とびとびに」とあり、春の大潮のころ潮が遠くに引いた磯辺の岩を伝いながら磯菜を摘んだのであろう。磯菜は磯辺にみる石蓴（あおさ）などの海藻を指す。遠目にはのどかに見えるが、波のうねりは侮れず音もなく腰の辺りまで浸かることもある。職業としては厳しいが、浅い所の磯遊びであるならば春をおおいに満喫したのであろう。

呼び鈴に本伏せて立つ花の昼 井村和子

「花」とはふつつ桜の花を言う。俳諧では、とくに春の花の代表として桜の花をさす。しかし花は桜でありながら、春の花一般という重層的定めにより詩的イメージは豊かである。句は、呼び鈴に読みかけの「本伏せて立つ」とある。華やかな花の昼であるが「本伏せて」に、ものうさと一種の不安の象徴を垣間見る。微かな陰影により句に奥行きが生まれた。

囀やひつくり返す玩具箱 榎本文代

春の小鳥たちの囀りである。地鳴きと区別して高音を張ったり、声色を使ったり、浮かれ唄風の鳴き方も。多くは繁殖

期の雄の恋歌であるが、テリトリの宣言でもあるという。句の「ひつくり返す玩具箱」におどろく。子供の元気が良いのか、叱られた腹いせか、散らかった玩具に満足気である。日常の風景だが、春は内も外もテンションが高めである。

まだ固き制服の襟 一年生 神田美穂子

入学式は、小学校から大学までふつつ四月上旬に行われる。特に、小学校の時の入学式は、忘れたいものがあるようだ。句の「まだ固き制服の襟」は中学、高校であろうか、小学校なら私立かも。制服に憧れて来た子もいるに違いない。固い襟は、彼等が子供なりの人生の出发点に立った証である。

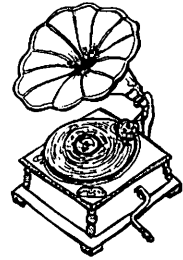
うすばかげろふ肉厚の葉裏より 亀田やす子

ウスバカゲロウは昆虫で、透明な翅をもち、外形はトンボに似ているが小型である。アリジゴクの成虫と聞けば驚く。形も名も儚げであるが、成虫になって秋に近づくと頃産卵して一夏で死ぬ。その儚い「うすばかげろふ」、こともあろうに肉厚の葉（井慶草あたりか）との絡みがおもしろい。

鈍色に細波尖る 霰ぐもり 沢辺たけし

春の季節風に乗って、モンゴルや中国北部で舞い上がった大量の砂塵が降るのが霰、それによって日本も日射量が減る状態が「よなぐもり」で、室内にまで塵が積もったりする。句は水辺の様子、「細波尖る」とあり風も加わってきたようだ、辺りを包む鈍色は、何とも鬱陶しいかぎりである。

同人作品



江見悦子選

札幌 岡本敬子

如月のくちびる渴くものおもひ
雛の夜の干菓子ゆつくり溶けにけり
消しゴムの汚れを削る余寒かな
霏こめて畑の雪解のひもすがら
遅れがちの一羽吾かも鳥帰る

札幌 林陽子

父母の遺影今宵は雛の間に
微酔の項にやさし春の雪
春風や遺品広ぐる考の部屋
雪解急撫百幹のあはひより
静かなる雨を楽しむ四温かな

札幌 落合裕子

人も木も動き始むる雪解時
月蝕を雲のまにまに見る春夜
佐保姫の足音運ぶ水の音
アスファルトの黒きを選びて雪解道
喜寿の吾に届く吉兆桜餅

札幌 濱谷和代

根菜のポタージュの夜余寒なほ

ひもすがら降つては融くる春の雪
木の芽風植物園のカフェテラス
献香の絶えぬ札所や草萌ゆる
御厨人窟の小さき祠や冴返る

札 帳 大 内 和 憲

陸ふさぐ万の氷塊オホーック
凍滝の放つ地のこゑ山のこゑ
写経帳に鋭声落とすや百千鳥
雪のこる方へと移るけもの径
卒業式ひとり笑へばみな笑ふ

札 帳 紅 露 恵 子

日脚伸ぶ下校の子等の立ち話
編隊のわづかな乱れ鳥雲に
枝々のふくらむ林春の雲
雛納歲月ともに納めけり
雪解田の馬頭観音黒光り
春暁や鳥が鳥追ふ雑木山
春立つや川の蛇行は日を弾き
かたまりて薄ら日まとう春の鴨

札 帳 大 内 マ キ 子

山脈はあの頃のまゝ卒業歌
人待ちて日暮るる橋や春シヨール

札 帳 中 鉢 弘 一

雪解野に獣の大き跡残し
沼渡る風に空木の芽吹きかな
木の芽開く木々の目覚めを促して
春の素描鉛筆の芯やはらかし
春雲や鯉御殿の丘に立つ

札 帳 北 浦 詩 子

春光や新しき風部屋中に
それぞれにお顔確かめ雛納
校庭の真中に雪間広がり
春泥を避けて袴の女学生
風光るものみな疾く動きけり

江 別 佐 藤 哲

雪解野に汽笛のひびく長々と
春突風牛舎にはかに灯を点す
葉がくれに円き実残し沙羅の花
擬宝珠のむらさきしんと木の陰に
茫々と降りみ降らずみ春の雪

江別 太田 佳美

大雪山の命の滾り雪解川
小流れに触れんばかりに糸桜
冴返るラインに届く師の計報
衿元はクリーム色に春隣
道端の黒き雪塊獣めく

新潟 高橋 ひろ

ゆるゆると吹いて大きなしやぼん玉
零れたる菜飯の中の花の色
肩ゆるむ春夕焼の空を見て
手を取られ墓地へ近道犬ふぐり
爪を噛む癖は一生菜飯食ぶ

新潟 高野 松風

田一枚一枚ごとの雪間かな
さざ波に電線ゆがみ春の土手
鞠あまた長押に吊るし良寛忌
田へ村へ風に乗りたる春の鳶
あぢさゐの対の芽つんとあさみどり

益子 光岡 れい子

あたたかや庭に三つの土竜塚

撫牛を撫づる百の掌梅日和
八溝晴見下ろす里の麦青む
隠沼の鯉のばしやりと水温む
山茱萸木戸笹葉園のあまねき光好文亭

芳賀 大村 かし子

春の朝声を張り合ふ群れ鴉
男体山も筑波山も見ゆる春田打
大椀に盛る蛤のすまし汁
植込みに挙つて鳴けり春の鳥
温む池ぐらりと動く神の鯉

宇都宮 阿久津 勝利

せせらぎの音渡り来て風光る
芽吹き初む鳶の笛降る雑木山
落武者の里の山山雪解光
麦青む一握りの雲遠山に
那須五峰柵に寄り来る孕み馬

栃木 上岡 佳子

一斉に野焼の火入れ狼煙めく
遠富士の見る見る隠る大野焼
末黒野の巢塔みすに鶴の番かな

独り居の茶の間に飾る押絵雛
小流れに揺るる日輪蓬萌ゆ

佐野 増田 幸子

クレソンへ水やはかくくぼみたり
野遊の子にはじめての仔牛かな
梅東風や猫は尻より振り返る
ただいまの声より早く子猫かな
吊り上げし角材廻る梅日和

佐野 加藤 季代

初つばめ真白き胸の翻る
春の月縹の空を上り初む
小さき灯を眠らぬ雛に点し置く
青空を押し上げてゐる松の芯
潦といへどさざ波雀の子

佐野 阿部 澄

雨を得て漸く二寸ヒヤシンス
軽トラに白一色のチューリップ
膝当てに春泥厚き庭師かな
ままごとの記憶の匂ひ春の草
手庇の媼こぶしの花仰ぐ

佐野 芝宮留美子

枝先に風をからめて雪柳
山裾を染むる紅梅帯なして
三龜路の土押し上げて雪割草
早春の焼けあと著き登り窯
浅春や伐採の檜の香りたる

佐野 島田 和枝

薄墨に暮れゆく山や冴返る
菜の花忌雲ゆつくりと丘の上
雨上がり弾けるやうにクロッカス
涅槃西風更地のままの震災地
朝摘みに軽く一塩花菜漬

佐野 売野 緑

木洩れ日や雪割草のうつむける
山の池雑魚の浮ききてうらけし
道塞ぐ程の馬酔木の真白かな
板一枚渡す橋越え路の塋
姉の忌のすみれ咲く坂登りけり

群なせる節分草や鳥の声
佐野 店網 洋子

黄花藤の新芽しろがね色をして
枝銜へ巢組みの鴉飛び行けり
梅東風やなで牛にある日のぬくみ
参道に散りつくしたる梅の花

足利 大 木

茂

梅白し五百の羅漢住まふ寺
水琴窟地底の春を奏でけり
燭おぼろ紅殻褪する大御堂
荒東風や三疊山のミモザ逆巻きて
ゴンドラリフト揺るる眼下の斑雪

土浦 澤

照 枝

春疾風ひと日波立つ桜川
との曇り節分草の蕊のぞく
沈丁の花ほどけたり無縁仏
土佐水木風の池面に張り出せり
湧き水の透けたる底に芹青む

加須 茂 木 弘 子

苔まとふ藤の古木の芽吹きかな
小綬鶏の呼ばふ林の奥処へと
一木を搦め山藤芽ぐみたり

粒ほどの魚影ひと群浅き春
春風を聞いてゐるなり思惟仏

さいま 山 本 右 近

七色の油膜の汚れ水ぬるむ

春塵の指跡幽か駅ピアノ

ひとすぢに光る荒川鳥帰る

ひとひらの紙片となりて初蝶来

春宵や声に遅れて影うごく

所沢 三 好 か ほ る

ケーナ聴く駅前広場風花す

朝の庭輪切りのみかん吊るしおく

苗札の並ぶ薬園風荒き

南国の文旦届く香のあふれ

はらからの集ひいつもの雛の膳

所沢 南 雲 秀 子

春雨のひと日をかけて煮物かな

そば食べに潜る暖簾や吊し雛

早咲きの桜に古寺のはなやげり

菜の花の空青々と奥武蔵

手をつなぐ園児の散歩雪柳

千葉 田 中 道 江

道路の目地均す背中に春日燦
甘酒茶屋まつる尺余の内裏雛
木の芽風植物園にひもすがら
菜の花を越えて外海光りたり
失せ物の見つかる朝初燕

千葉 松 浦 陵 保

春キャベツ地球の丸く見える丘
ふんだんに地下水流し芹を摘む
囀や遠き近きを聴き較べ
囀や何を話してゐるのやら
水温む泥鰌や鮒の動き出す

千葉 喜 多 恭 仁 子

雪解風奥日光の隠れ湯に
春光をまとふあの日の一本松
劣化進む校舎の遺構花こぶし
卒業式照れてひと言「ありがとう」
亡き夫の米寿を祝ふひなの日

千葉 大 月 玲 子

春や春鳥の目をもて野道行く

佐倉 大内 佐 奈 枝

春耕や土に鋤き込む日の温み
春日背にオランウータン振り向かず
窓つたふ光の雫春の雪
裏山は巨きゆりかご抱卵期

佐倉 三 屋 英 俊

ひそめきを覗けは雛の夜の宴
田起しや先づ田の神に酒と米
坊守の媼寝釈迦に里料理
寝釈迦は師天仰ぎ泣く弟子は我
瓶のジャム指にこそげてうらけし

佐倉 横 川 良 子

春の雪古地図にありし畳み皺
戦世に神の沈黙春の雷
いつもより少し遠くへ春野かな

休め田の畦を縁取るつくづくし
鉢植ゑに水を足しやる日永かな

四街道 奥 太 雅

竹林の打ち合ふ響き春一番
防犯の幟取り込む春疾風
沢水のきららを纏ひ水草生ふ
碗ほどの蝌蚪の卵塊透き通る
一番に接骨木の花解れけり

四街道 塗 木 翠 雲

少年の太き糸引くいかのぼり
燭灯す男所帯の雛かな
母あらば母と食ひたき桜餅
城跡の壕の深きや竹の秋
鍋蓋の取つ手の緩む余寒かな

船橋 山 下 良 江

父母にひと日近づく彼岸かな
色あせし雛に供ふる赤き餅
夫婦雛ひかりの中に笑み給ふ
早咲きの桜に重しけふの空
父母の墓に詣づる春の午後

船橋 久保村 淑子

予想紙を片手に下車の春シヨール
満開のミモザの花にくらくらす
囀にはちきれさうな一位垣
子の帰る後の残り香春の宵
草青むすぐ抜くる草抜けぬ草

船橋 片 桐 帆 一

春めくや背筋伸ばして声発す
雛壇の母のひひなの眉太き
山茱萸の花の明かりや夕支度
清明の風に波立つ東京湾
春疾風吃水線のひかりゆれ

船橋 宮 本 加 津 代

春愁を振り払ひつつ試歩の日々
リハビリの杖の花柄風光る
目鼻なき和紙人形や花ぐもり
囀を聞き分けながらまどろみぬ
春昼や食後の薬よく忘れ

船橋 中 嶋 久 登

カーニバル前に後ろにサンバの足

春宵の足絡みたるタンゴかな
大西洋船の真ん中雛飾る
蒲公英の絮や良き風じつと待ち
鼓草握り締めたる小さき手

柏 山本とく江

余寒なほ夫安らかに逝きにけり
亀鳴くや葬送終へし静けさに
亀の首浮かべきらく春の水
ふと見上ぐ春星一つ潤みたり
ふらここに揺れて母待つ男の子

柏 内田郁代

退院の夫の夕餉に桜鯛
生ぬるき夜風にうるむ春の月
満開となりてもつる花まんさく
春光に満ちて梨園晴れ晴れと
囀をあまた抱ける楠大樹

柏 古川京子

足元にほぐるる波や蘆の角
白鳥引く羽純白にととのへて
竹藪にふくるる光路の莖

草萌の浮力足裏にかすかなる
さみどりの苔に珠なす春の雨
雛まつり妹の占めぬし母の膝

流山 穂刈照子

故郷の泥を吐き出す蜷かな
春を逝くたつた一度の紅を差し
春星へ最後は数珠を握らせて
骨壺の重さを抱く余寒かな
梅散るやぼつんと空の車椅子
線香の匂ひの満つる臚かな

市川 奥澤よし江

天晴な空を力に春田打
春の宵本を重ぬる枕元
ずり落ちて水面を揺らす亀うらら
着水のしぶき高々春の鴨
茶筌置く指の嫺やぐ春障子

東京 名和政代

廃校の古き切株葉ゆる
外濠の雨にゆさゆさ柳の芽
本郷の床屋訪ぬる啄木忌

連翹の石垣めぐる芭蕉庵
街を行く張子の象や仏生会

東京 藤田裕子

悔み文今宵も書けず余寒かな
春浅しグラタンの焦げふつと
早春の光吸ひをり奉書紙
銀の匙添へて飾れり雛あられ
再びの逢ふを約して雛納

東京 加賀葉子

戸を引けばミモザ明るき書道塾
夕付きて沈丁の香に湿りかな
剪定の庭師ながめてばかりかな
みづ色の空へ空へと櫂の芽
ゴンドラを降りて坂道土筆伸ぶ

東京 久留島規子

一杓の水釣釜の鳴り静め
水温む毘沙門天に銭洗ふ
田子の浦潮目変はりて霞立つ
朝市の婆と目の合ひ蓬餅
紅殻の褪せ茶屋街の春寒し

東京 岡村純子

露の瑩色よく添へて漆椀
バゲットの香ばしき春の雪
土手青み年長組のばらけ出す
昔子の作りし雛も上段に
浅春や長子土産のカルシウム

東京 桑原優美子

おほる夜や高層ビルのぬつと立ち
啓蟄やほどけぬ紐をほどきゐて
声あげて夢に目覚むや春の闇
花冷や牛筋とろり煮えあがる
春キヤベツぱらりと剝ぐや夕厨

東京 三村紀子

冴返る無法地帯がすぐそこに
花の冷えよもや令和の石油危機
受話器よりA Iの声臘の夜
婆の歩に合はする犬や仏の座
亡き父と似し人見かけ入り彼岸

東京 小池清晴

木戸潜る肩にぼとりと垂り雪

幹捻れ半身となりし梅開く
流れ着く大魚の骸春嵐
穂先添へ小鉢に独活の酢味噌和へ
太陽の近き枝より辛夷咲く

東京 一由久美子

雨音のしみある椿散りにけり
仏壇の母の若しや黄水仙
農具市地べたに光る獣毘
園丁の高梯子より初蝶来
絵馬堂に大きな額花の雨

武蔵野 砂地宏子

夕まぐれ白梅の白残りたり
空色の家にミモザの花の庭
約束の今日満開の辛夷かな
頬紅の汗ばむ稚児や花会式
やはらかに風の形に柳影

武蔵野 松井宣夫

ランドセル母が担いで春の芝
春泥や畑に残る獣跡
廃業の牛舎を囲む犬ふぐり

菜の花や海岸線に続く道
山茱萸の薬草園の門に咲き

町田 広瀬俊雄

刈跡の畔のすみずみぬふぐり
くさむらを分けて春蘭花となり
かたまりてこぼるる白や雪柳
春の雪つもりし庭の明るめり
淡雪や街美しく清められ

町田 桔梗 純

春雨の去りたる朝の深呼吸吸
どら焼の抹茶とさくら花の冷え
合格はスマホへ届き宴闌くる
牡丹雪浴び朝刊を取り出せり
朝の晴白木蓮のふつくらと

日野 喜多尾明子

侘助や猫はしつぽをひとほらひ
白富士の溶け入るばかり春霞
青空へ向きそろへたり白木蓮
春宵を子に読みきかせつつ寝落つ
弥生かな雲は象を成さずして

横浜 西 本 才 子

土手下に山羊を繋がり犬ふぐり
道に沿ふ流れ一筋濃山吹
水音へ並んで来り残る鴨
人影にベランダをたつ雀の子
松の芯鴉たがひに鳴き合へり

横浜 田 賀 煤 恵

春の雨土の匂ひのやはらかし
水仙の折れたるままに匂ひけり
やはらかく千切れゆく雲春の空
夫の忌や白木蓮の咲き初むる
抽斗の中の明るき桜貝

横浜 三 木 豊 子

白梅や巳の日賑はふ弁財天
冴返る一人に余る粥炊いて
芍薬の赤き新芽の首擡ぐ
かたまりて蠢く影や蝌蚪の水
友見舞ふバスを待つ間の春の雪

横浜 星 野 信 子

玉砂利の隙間に殖ゆるすみれ草

ハイタッチ幾度も交はし卒業す
寄り道は婆の営む蓬餅
紅椿夕日ふくみて苔の上
茹でたての五島うどんや春の風邪

川崎 大 久 保 進

花ミモザ日照雨に光る黄のしづく
羊歯萌ゆる曲がりくねりの谷戸の道
足跡の囲みてゐたり露の臺
あんまんの湯気ふところに春時雨
外電に飛び交ふ戦禍鳥雲に

鎌倉 恒 川 清 爾

料峭や入れ歯少々噛み合はぬ
金髪に青き目もゐて雛の壇
風花やいよよ矢れる阿夫利山
あたたかや妻と猫背を笑ひ合ひ
仁王像の足にひび割れ麦青む

伊勢原 佐 藤 和 子

五指をもて探れば確と名草の芽
方言で話す気安さ菜飯食ふ
茎立の花いきいきと雨上がり

雲雀落ち川原の石にまぎれけり
咲きながら錆色きざす白木蓮

静岡 大村 峰 子

囀の奥に口笛交じりをり
楓の芽析る形にふくらみて
吊橋の杉の花粉に紛れたる
蛇穴を出て地下足袋に囲まるる
椶の芽の摘み残されてゐる高さ

静岡 宮崎 知恵 美

渡船場の工事轟く寒の明
山菜萵の黄や古びたる柚の家
雲一つ無き青空や梅白く
露の莖二つ並んで顔出せり
沈丁花庭より道へ香をこぼす

静岡 望 月 敏 男

手袋の辿る家康遺訓の碑
禅寺に人待つやうに梅の花
城跡の日向の匂ふ冬蒲公英
蹴球子を囲む冬木の影長し
大寒の鋼の如き手水かな

静岡 藤原 千代子

つるし雛赤き鼠も吊るされて
沢音にひと日菖蒲の根分かな
全身に朝の日散らし蛇出づる
木瓜の花一花一花に雨の粒
三人となりし句会や鳥雲に

静岡 荻野 加壽 子

送るとは残さること多喜二の忌
ものの芽や金平糖の角太る
淡き世の淡き交はり雛あられ
ペン立てにペンを休ませ春の昼
しやぼん玉影といふものありにけり

静岡 小川 明 美

抹茶碗の光琳梅や寒明くる
風船の二ノ丸水路漂へり
頭から爪の先まで御身拭
春祭好みの髯のだるま買ふ
家苞にリュックぱんぱん苗木市

静岡 藤 本 節 子

浅春や孔雀は羽を閉づるまま

投票の列の殿 牙返る
病院の待合室の余寒かな
谷川の細き水音 春遅々と
春立つや薄茶に添ふる金平糖

静岡 大長 文 昭

春風に木屑を散らすチエーンソー
石を積む堰に泡立つ春の川
春寒や藪に竹切る女声
またひとつ平和が潰ゆ春寒し
象の鼻届かぬところ春の草

静岡 加山 ひさ子

うららかや雀の浴ぶる潦
滲みたる封書の宛名春寒し
黒々と濡れたる幹や牙返る
恋猫に本降りとなる日曜日
重さうに風に抗ふ紫木蓮

静岡 石川 裕子

家移りのきりなき芥春遅遅と
雛の間へ紙飛行機の飛び込みり
束ねたる俳誌の嵩や春の星

雑布に疵の縫ひ目や花馬酔木
円空仏にまみゆる春の日本橋

静岡 本多 ひとみ

一服の抹茶に吐息春の昼
雨しとど濠に寄りたる春の鴨
草鞋履く神馬の背に春の塵
波平ら沖を行き交ふ白魚舟
湾を舞ふパラグライダー風光る

静岡 杉 澤 修

分校に届く海光地虫出づ
けふ雨水竹百幹のうすみどり
どこまでも空のま青や春うれひ
銀の粒空へばらまき沙羅芽吹く
大輪をほどきて昏し紅椿

静岡 松 永 博子

弁天の胸の尖りや春ともし
うららかや齒を剥き笑ふ福祿寿
のどけしや甘納豆の量り売り
春めくや日照雨の朝のミルクティ
夕霞コンテナ船の黒き影

射水 成瀬真紀子

やはらかき雀の着地雪間草
電池切れのやうに猫の子寝落ちたり
フラミンゴの羽を持ち去る巣組み鳥
存分に濡れ啓蟄の土に霽
蜜蜂に大小のありホバリング
白鳥引く立山と白競ひ合ひ

金沢 今越みち子

がうがうと堰の銜や木の芽時
スーパ―の裏手は海や目刺干す
茶屋街の出窓に三味と紙ひひな
春の日や閻魔を拝み笑はるる
春光や手を振り返す貨物船

金沢 伊藤美音子

山茶花のこぼれ真昼のつむじ風
冬木の芽溪ふかきより水のこゑ
愚知聴くも聴かすも親子みかん剥く
淀泊の灯の潤みある去年今年
針箱に糸の七色針起し

金沢 高田たみ子

せせらぎのリズム軽やか芹を摘む
硝子窓みがき天皇誕生日
水分石なじむ流れやうららかに
如月の空気はりつめ綾子句碑
残雪の連山迫る日和かな

金沢 豊田高子

蛇穴を出づさはさはと草の雨
小流れや日の光這ふ蜷の道
殉教の谷へ堕ちゆく黒椿
末黒野の雨や火の舌蘇り
寒戻るコーンポタージュ吹きくほめ

金沢 松井佐枝子

松脂を採りし痕ある若緑
水温む背鰭分けゆく六六魚
恋猫の馬穴蹴飛ばし明けの星
黒椿殉教の碑へ風硬し
節穴を彼岸の日の矢飛びだせり

※六六魚……鯉の異名

金沢 石川純子

春の靴きゆつと踏み出す一歩かな

高空に右往左往の涅槃雪
亡き人のいつも声なく春の夢
落のたう摘みながら声離れゆく
恋猫の挑むやうなる眼かな

金沢 河野尚子

下萌の彩る牧に馬放つ
白山の青空を鳴き鳥帰る
藻草分け池滑らかに春の鴨
城垣の石に吸はるる春の雪
身じろがぬ鷺に雪解の波荒し

金沢 道場啓子

空揺らし一団の鷹急降下
雛壇を飾りし安堵先づ妣に
色刷の多き新聞春近し
名を知らぬ鳥の来てをり実南天
地震の疵残るホームに飛花落花

金沢 杉本年虹

野に山にタクラマカンの黄砂降る
追儼会や官司の弾く弦の音
二階まで福豆を煎る香の満つる

朝寝してくくもる鳩の声に覚め
料峭の女松の肌真緒なる

金沢 南恵子

啓蟄や地球儀回す旅ごこち
門に入る一步へ梅の香のあふる
小流れをぼんと跨げば囁れり
天井画の龍の爪立ち寒戻る
春風やじゃんけんに負け鬼となり

金沢 松下信子

龜ぐもり二分遅れの置時計
バス停へ急ぐ抜け道雪解風
照り翳り目まぐるしき日春障子
窓際のサックス眩し花ミモザ
燭消せば雛も眠らむ夢も見む

金沢 北川禮子

木偶舞へ篝火照らす雪解道
解れゆく金縷梅の黄の耀へり
せんざいへ涅槃団子の五色かな
透き通る放生池や菖蒲の芽
白加賀てふ梅に幽かな薄緑

金沢 清水英理子

余寒なほ二輛電車に客一人
豪商の館狭しと盆梅展
子も孫も男ばかりや古雛
金継ぎの染付小鉢花葉漬
青空へ句点読点名の木の芽

金沢 松田好子

見え隠れする兎目で追ひ野に遊ぶ
祖母の雛妣の雛と並べおく
小豆煮る厨を叩く彼岸西風
合格を待つ絵馬揺らす春北風
春の色朝日さし入る磨硝子

金沢 井端久子

晋山の木魚の一打ごとに春
涅槃図へ五体投地の尼若し
いと大き涅槃団子の五彩かな
白梅の風なき風にこぼれ継ぐ
霊沢といふ井の底にある余寒

七尾 谷渡末枝

大いなる一樹芽吹きの風強く

春一番混み合ふ港の定食屋
試着室鏡の中の合格子
胎動があつたと桜餅つまみ
給水の殿にゐて犬ふぐり

白山 加藤美栄子

合格の文字の太しや絵馬揺れて
撫牛の背の苔むして日の永し
蛇穴を出で山の日を充分に
雪解や峰青くして杣せはし
象を曳く子らも巡査も花祭

敦賀 倉谷ます美

剝落の土蔵へ風の凍返る
春寒し朝のネクタイ固くしめ
丑三つの町を包める月おほろ
追ひかくる顔ほど大きしやばん玉
艾草干す箱階段の黒光り

敦賀 鶴田勝子

竹林の堅雪踏んで人力車
道場の的射る音や凍返る
春灯下ちひろ生家の箱階段

春耕や土竜の道の盛り上がり
本殿の磴百段に雛飾る

敦賀 中川 雅 月

蠟梅の香を懷に岬の宮
朝一の始発の駅や凍返る
堅雪に足を取られし酔ひ倒れ
階段の踊り場あたり石鹼玉
白魚を芭蕉も愛でし隅田川

敦賀 中村 優

ぼこぼこと等間隔に石鹼玉
弾けまた飛んで弾くる石鹼玉
刀剣を鍛ふる出雲涅槃西風
縁側に雪解雫のビート打つ
しほまねき鋏は武器か求愛か

敦賀 為永 香月 枝

木の芽漬鞍馬の里はまだ黙す
春一の風に乗り来る鳶の笛
学問の宮の撫牛梅二月
雪解水磴百段を滑らかに
石鹼玉追ひかくる児を追ひかくる

冬苺求肥に包み老舗守る
古民家の庭木に吊るす雛揺るる

徳島 福島 吉美

花菜活け間口二間の煎餅屋
築山に植樹の穴や土匂ふ
涸川の底に水音ごろた石

徳島 村上和 義

臘夜の停泊船の窓明り
一本の蜂須賀桜賑はへり
一斉に帽子飛ばして卒業す
学舎の古りし煉瓦や初燕
指笛に猛る闘牛息荒し

徳島 宮西 修 一

水切りの弾んで岸へ寒明くる
たつぷりと水やる畑けふ雨水
泥まみれなる啓蟄の犬の鼻
草抜いて根つこに春の土匂ふ
川沿ひの蜂須賀桜咲き揃ふ

徳島 平岡 功

小躍りの勢ひのまま滝凍る

早春の潮入川に群るる稚魚
潮の香の強き方へと梅探る
満開の梅の余白の空真青
春疾風ドミノ倒しの駐輪場

石井 木内 マヤ

父米寿白木蓮の咲き始む
打ち寄する波のごとくにれんげ畑
春うららジープで運ぶ結納品
寒もどりブルーグレーの吉野川
綿菓子の上に溶けゆく雛祭

小松島 岡田 あゆみ

旭日旗揚ぐる軍艦風光る
指揮棒の描く三角春めけり
ちぎれさうな鳶の尾羽や春一番
金言は住職の文字あたたかし
初蝶来ト音記号を書くやうに

松山 入河 大河

つややかに八重反り返る白椿
電柱の鵜上向く鳥雲に
梅林の近くの駅に人の列

荒れ果てし庭に一本枝垂梅
やはらかく日の光降る雨水かな

福岡 宮田 千恵子

春めきし日差しに鉢の向きをかへ
目薬の頬をぬらせり花の雨
ぴちやぴちやと水飲む猫や春の昼
青空へくつさめ一つ桃咲けり
野水仙すつと日向にほぐれけり

長崎 丸本 祥夫

酒蔵の土間の凹凸寒造
枯菊の火の香火色を興じたり
鯨見の櫓の手摺懸大根
居留地の坂を朱櫓の転がれる
水掻きの起きてゐるなり浮寝鳥

西海 山下 敦子

雲多く言葉少なく春愁
春雨の河口の石を濡らしをり
航跡の一直線や島の春
日和よしぷちんぷつんと剪定す
さざなみを漣の追ふ春の海

宮崎 中山 宣

長閑さに暖止まらぬ駱駝かな
薄霞黄昏どきのかねつき堂
硝子戸を叩き付けたる春嵐
風呂に聴く強東風窓を叩き過ぐ
桃の日や赤銅色に月隠れ

宮崎 中山 芳 教

春浅し風呂桶に湯を満たしをる
豆撒の闇に狙ひを定めたり
四阿の丸太椅子愛で梅見かな
潮騒に松韻重ね梅の苑
梅の香に塗るる齡八十九

宮崎 鳥居 達 史

石棺の蓋半びらき月隴
春雨や助六ばりに蛇の目傘
隠居家に風を入れたり花大根
囀や兒童駆け出す昼やすみ
開墾の闇をつんざく雉子の声

那覇 中 本 清

緋桜のうつむく夜の救急室

まなうらに春月のぼる病臥かな
試歩の朝この春風のとこしへに
王城へ爪先上り松の芯
花の闇蒼し社は仮普請

那覇 辺野喜宝 来

桜東風せりふの長き組踊
旧正やともづな固く大漁旗
春昼の潮のほひ濃かりけり
初蝶の遊ぶ水音風の音
朝戻る泥の臭ひの猫の夫

西原 宮城 勉

除け置きし鉢に太芽や土かづき
入院の妻のもの干す二月尽
ぞんざいに巢組む鳥あり戸の隙間
海溝宮古島地震群発のきしみ止まざり春の雷
春の雲機銃剥き出す米軍機
春風に春の樂章聞く窓辺

豊見城 渡真利真澄

田水張りたちまち田の香広これり
浦風のやはらかき日の一期田植

一期田の植えしばかりに風立ちぬ
浦風や男耕す母の畑
天日の遍く遠き野焼かな

ベルシ 鈴木 波 江

戻りたる猫が扉に鳴く春の暮
穴出でて蟻わが階にのほり来る
石橋に恋のふたりや柳の芽
焙じ茶の熱き一服春暖炉
工房の金鉦たたき長閑けしや

万象基金のご報告

興津千鶴子様（静岡）

三口

柳澤 宗正様（神奈川）

一・二五口

（令和8年4月1日～4月30日・受付）
「万象」の発展のため、大切にに使わせて頂きます。

万象俳句会

俳句

6月号
予告

5月25日発売

巻頭作品50句——小川軽舟
作品21句——今井聖・小林貴子

蛇笏賞の60年

永久保存版周年記念特集

- 蛇笏賞クロニクル——歴代句集の代表作はこれだ！
西村麒麟・津川絵理子・瀬間陽子・
堀本裕樹・高田正子・関悦史
- 受賞を逃した名俳人
守屋明俊・上田日差し・丹羽真一
- 特別寄稿 筑紫磐井「直近10年の受賞作とこれから」
- 蛇笏賞トリビア……編集部編

第60回 蛇笏賞発表！

- 受賞のことは ●自選50抄
- 選考委員選評 高橋睦郎・中村和弘・
高野ムツオ・正木ゆう子

※内容は変更になる場合があります。

電子版同時発売！ 電子版は「BOOK☆WALKER」(<https://bookwalker.jp/>) など電子書店で購入できます。

発行 角川文化振興財団 発売 株式会社KADOKAWA <https://www.kadokawa.co.jp/>

同人作品の佳句

江見悦子選

如月のくちびる渴くものおもひ
零れたる菜飯の中の花の色
クレソンへ水やはらかくくほみたり
膝当てに春泥厚き庭師かな
亀鳴くや葬送終へし静けさに
足元にほぐるる波や蘆の角
春を逝くたつた一度の紅を差し
早春の光吸ひをり奉書紙
木戸潜る肩にほとりと垂り雪
春宵を子に読みきかせつつ寝落つ
またひとつ平和が潰ゆ春寒し
銀の粒空へばらまき沙羅芽吹く
やはらかき雀の着地雪間草
山茶花のこぼれ真昼のつむじ風
海溝のきしみ止まざり春の雷

岡本敬子
高橋ひろ
増田幸子
阿部澄
山本とく江
古川京子
穂苅照子
藤田裕子
小池清晴
喜多尾明子
大長文昭
杉澤修
成瀬真紀子
伊藤美音子
宮城勉

同人会だより

斎藤恒子さんの思い出

久留島規子

4月、卒業50年の花見の会が行われ、同期の150名余りが杉並の女子大に集まった。待合せの駅で待っていると、「今朝、母が亡くなったので出席できない」と親友からの電話。その親友の母上こそが、私を俳句の世界に導いて下さった「風」の大先輩、斎藤恒子さんである。

恒子さんはご主人の転勤で名古屋へ転居した折、私の母を句会に誘って下さった。栗田やすし先生の指導する「風」名古屋句会だった。その後、母の勧めで私も仕方なく入会。句会に属さず、気儘に投句するだけの会員だった。厚かましくも時折、栗田先生の吟行会に加えて頂き、中でも、沢木欣一・細見綾子両先生が同行された修善寺への吟行旅行は忘れられない思い出となった。

夫の任地のベネズエラから帰国して、初めて句会に参加してみようと訪ねたのが小林愛子先生の保土ヶ谷句会。保土ヶ谷句会は「風」の時代から現在まで通算500回を数える。私にとって生涯の師を得た俳句の原点である。

「風」神奈川県支部の大会があった時、恒子さんをお誘いしたら、東京から数名の方と出席して下さいました。お会いしたのは、結局この時が最後になってしまった。

一昨年7月の俳句カレンダーに恒子さんの句を見つけ、鑑賞文を書いてお送りしたら、大層喜んでいただいた。

灯を消して星へと返す金亀子

恒子

4月の「万象」オンライン同人句会高地点

- | | | |
|---|------------------|------------|
| 6 | 静けさや芽吹き音は森に満ち | 沢辺たけし(流山) |
| 6 | 光縫ひ自ら光り燕来る | 成瀬真紀子(射水) |
| 6 | しなやかに水押し戻す蝌蚪の紐 | 穂苅 照子(流山) |
| 5 | 法話聴く良太師眠る彼岸寺 | 塗木 翠雲(四街道) |
| 5 | 陽炎の野を踏んまへて太極拳 | 中村 千久(志木) |
| 5 | 老酒の甕は野ざらし花曇 | 久留島規子(東京) |
| 5 | 卒業生島へ伸びたる紙テープ | 丸本 祥夫(長崎) |
| 5 | 丁寧に自転車拭いて卒業す | 宮西 修一(徳島) |
| 4 | 友逝くや吉野の花のふる里へ | 中村 千久(志木) |
| 4 | 足指のじやんけんばんやうらけし | 清水英理子(金沢) |
| 4 | 万象の息吹を映し水温む | 穂苅 照子(流山) |
| 4 | 金継ぎの器に点てて桜餅 | 松田 好子(金沢) |
| 4 | 卒業子楷書の感謝状母に | 谷渡 末枝(七尾) |
| 4 | 夜桜や券売機より京ことば | 杉本 年虹(金沢) |
| 3 | 帯締めて純子師囲む春の夢 | 今越みち子(金沢) |
| 3 | 泥煙あげて恋するむつごろう | 村上 和義(徳島) |
| 3 | 天井の画竜も花に遊ばんや | 江見 悦子(東京) |
| 3 | げんげ田やひとり降ろしてバス行く | 喜多尾明子(日野) |

(※句頭の数字は点数を示しています)

俳句カレンダー掲載句自註

令和8年版俳人協会『俳句カレンダー』に掲載された句と作者による自註を順次ご紹介いたします。

あをあをと鮎の匂ひの家灯す (6月) 中條睦子

北陸地方での鮎の解禁日は6月初め頃が一般的。解禁になると愛好家は競って釣り場に出かけてゆく。

私の知人もその一人だ。仕事の休みを縫って県内では手取川、富山では神通川、庄川と出かけてゆくという。

溪流釣りでは、鮎は石についた藻類が主食で、菌でなめとって食べるということから、石についたその痕跡を見つけることで鮎の居場所が分かるのだとか。

知人は鮎を食すことはしないそうだが、その釣果が楽しみで季節の間何度も出かけるそう。我が家の家人が鮎が好物と知っていてくれて、毎年釣りに行ったその日のうちに新鮮な鮎を届けてくれる。ことに庄川の鮎は水がきれいで冷たいことから身が締まっていて香りが良い。そのうえ、小ぶりでも骨も柔らかくて食べやすい。

この日も夕方、新鮮な鮎が届けられた。氷を入れたポリ袋を開けると、部屋中に青々とした匂いが広がる。台所の明かりをつけ、ヌルヌルする鮎に丁寧な塩を振る。炭火なら上等だが、ぜいたくは言っていられない。グリルで焼く。庭の山椒の葉を摘んできてすり鉢で摺り、山椒酢を作って焼きたての鮎を堪能する、至福の夕餉が始まる。



今回も古今の佳句・名句に触れながら遊んでゆきましょう。空所に山偏、山の付く漢字を入れましょう。

- 1 これはくとはかり花の吉野□ 安原貞室
- 2 雲の□幾つ崩れて月の山 松尾芭蕉
- 3 □鼻やここにもひとり月の客 向井去来
- 4 愁ひつ、□にのぼれば花いばら 与謝蕪村
- 5 毎年よ彼□の入に寒いのは 正岡子規
- 6 火の奥に牡丹□るるさまを見つ 加藤楸邨
- 7 忘るなき春立つ□の瀬音かな 飯田蛇笏
- 8 時じくの九年母の実や辺戸□ 沢木欣一
- 9 □見ゆ十一月のむなしさに 細見綾子
- 10 海道に青□寄せあふ記紀の□ 内海良太
- 11 この闇に□茶花の赤沈みある 飛高隆夫
- 12 ただならぬ世のただならぬ雪の□ 小林愛子

【正解】

- | | | |
|--------|-----|-----|
| 9 峠 | 5 岸 | 1 山 |
| 10 嶺／島 | 6 崩 | 2 峰 |
| 11 山 | 7 峽 | 3 岩 |
| 12 嵩 | 8 岬 | 4 岡 |

佳句佳句しかじか

同人作品鑑賞(四月号)

亀田やす子

湖を風^ふ不死^{ぶし}岳^{ぶつ}風^{ふう}唸^うらせて 紅露恵子

前書きの支笏湖三句のうちの一句。湖は支笏湖である。地名歳時記によると湖の深さが323メートルという全国で2位の深さである。「風不死岳」から湖に吹き下ろす激しい風を「唸らせて」と聴覚的な描写が、北海道の厳しい自然界の凄さを物語っている。

地吹雪の白鳥玉となり眠る 大内マキ子

この句から「白鳥といふ一巨花を水に置く」の草田男の句を思い浮かべた。作者の句は地吹雪の中の白鳥を「玉となり眠る」と表現したのである。一塊となっている姿を玉と捉え、地吹雪の静まるのを微動だにせず耐える白鳥の強靱な生命力を詠んでいる。

おしゃべりの指は毛糸を意のままに 光岡れい子

手編みしている指を「おしゃべりの指」と擬人化し、指の動きが話をしているようだ表現している。鉤針か棒針で網みながら毛糸玉を転がし、思いのままに作品が出来上がる喜びが伝わる。どんな作品が生まれたかと想像すると楽しいものである。

元日はウィーンフィルと珈琲と 加藤季代

毎年、元旦の夕方にNHKテレビで「ウィーンフィル・ニ

ューイヤーコンサート」が楽しめる。音楽の都ウィーンからの生中継である。世界で一番華やかといわれる演奏で優しく溶け合うような音楽に浸って、作者は元気に正月を過ごしているのである。昭和5年の生まれ。珈琲を好み、俳句を詠み、音楽鑑賞にと、前向きに充実した日々を送っている作者。

家中の蒲団を干して子等迎ふ 奥 太雅

懐かしい光景である。居間や座敷の日の当たる廊下などに敷蒲団や夜具を所狭しと広げ干したものである。離れて生活している子供たちを迎える準備であらう。年に何回もない泊りを安心して寛げるようにと、子を思う気持ちの現れである。家族が一堂に集まり会話の絶えない情景が目に見えよう。

星を呼ぶやうに鼻鳴きにけり 穂刈照子

減多に出会わない鼻の句に想像を膨らませた。通り掛りに鼻の鳴き声を耳にしたのであろう。夕暮時から西の空には宵の明星が輝き始める。ホーホーと低い声で神秘的に鳴き続ける鼻の声の余韻が、恰も光り輝く星を呼んでいるようにだと、した比喩表現に心惹かれた。

かの日にはここに父の座お元日 藤田裕子

かの日とは作者の父が元氣だった頃のこと。テーブルの一角を占めていた「父の座」の思い出であらうか。元日には決まって世の中の動向やこれからのことなどを語っていたのであろう。今は父親の存在は消えたままである。一年の始まりである正月には、過ぎ去った日々が思い出されるのである。

「ご自由に」 山門前の仏手柑 松井宣夫

「仏手柑」は仏の手のような奇妙な形で普段見られない柑橘類で、檸檬と同じように芳香があり、正月の飾り物に良いと言う。作者の菩提寺であろうか。山門前の「ご自由に」の張り紙を見て即座に詠んだ句。この句の「ん」三つの響きが仏手柑の異様さを和らげているようだ。

新年を球子の富士と迎へけり 恒川清爾

この句の「球子」は文化勲章受章者の片岡球子。103歳で亡くなるまで、絵を描き続けていた人である。群青の富士と赤い富士に雪が描かれ、鮮烈な色彩の絵が印象深い。球子の絵に掛け替えた作者。その絵の力強さに見惚れながら新年に酌むお屠蘇は格別な味わいだったでしょう。

冬うらら埴輪の笑みに笑み返す 本多ひとみ

公園の一面にでも置かれている埴輪だろうか。散歩中に出会ったのである。細目をして微笑んでいるように見えたのか、無機質な埴輪に何故か人間臭さを感じ、笑みを返したと言う愉快な句。「笑み」のリフレインで季語が動かない。

松七日過ぎてととのふ文机 杉澤 修

正月が近づくと何かと片付けが始まる。使用していた文机の上も正月の用意で利用されたのだろう。思い浮かべるに、歳神様を迎え、供物や正月の花を飾ったり、いろいろ忙しいものである。この句は松七日過ぎて飾り物が無くなった頃。「ととのふ文机」の描写に、日常に戻った安堵感が伝わる。

弥陀仏を櫛るやうな煤払 井端久子

毎年日光輪王寺三仏堂で行う煤払を、映像で見ることがある。この句も大きな阿弥陀仏の煤払。長い真竹の穂先をさらさらと優しく揺すぶっている様子を見て「櫛るやうな」と描写した。仏に親近感を持って向かったことでしょう。

風邪の子と過ぐす小部屋の明り窓 木内マヤ

風邪を引くとしても咳や嘔で感染する恐れがあるので別部屋も仕方がない。作者は、風邪を引いた幼い子と二人で小部屋に移り、しばし面倒を見ているのだ。この句の「明り窓」が居心地を良くしている。本を読んだり、普段出来ない話をしたりして、熱の下がるのを待ったことだろう。

紫の炎となれり牡丹櫓 丸本祥夫

〈牡丹の枯枝燃ゆる見とどけぬ〉これは細見綾子の牡丹焚きの句である。須賀川の牡丹園が有名であるが、自宅の牡丹の櫓を燃やしての句かもしれない。いずれにせよ牡丹焚火の幻想的な紫の炎の美しさにうっとり見入っている景を想像する。因みに、「牡丹焚き」が主季語である。

冬北斗連れ退院の車窓かな 中山芳教

入院生活にビリオドを打ち、久し振りに自宅に戻る喜びの句。車窓には低い位置に見える冬の北斗星が輝き、窓に添って一緒に動いている。「北斗連れ」と擬人化して詠んでいることが、意外性と詩情を感じさせる。

宮沢賢治と行く

大内マキ子

岩手山指呼なる旅の薄暑光
後ろ手は賢治のごとし青き踏む
山猫軒待てど出て来ぬソーダ水
銀河鉄道ジョバンニと乗る夏の夢
山莊高村光太郎山莊に熊の爪痕はたた神
舌長き子ども河童よへぼ胡瓜
喜雨上がり座敷童子わらしよこつちさ来い
空蟬の骸ころがるデンデラ野
汗だくの婆の掛け声わんこ蕎麦
泣かぬ子と泣く子の勝負泣き相撲



東北地方が好きで岩手を旅した。宮沢賢治の生誕地へ行くと生家があり、青年時代の机やオルガンに触れた。農業・文学・芸術等に力を注ぎ、37歳の早逝は無念だ。

次に高村光太郎山莊を訪ねた。智恵子の没後に彫刻活動に全力を捧げた作品には力強さが感じられた。

遠野では伝説のデンデラ野を見た。貧困の為の口べらしに、時代とは言え胸が痛んだ。

旅の終盤は、大谷翔平選手の母校・花巻東高校へ。未来の選手たちがグラウンドを駆けていた。

阿波の春
平岡
功

渦潮の轟き巻くや阿波鳴門
渦潮を玻璃越しに観る渦の道
鶴巢作りするや撫養街道
菜の花の中を満満吉野川
うららかや大河光の帯となり
藩政の蜂須賀桜今もなほ
春雷や夜半漆黒眉山現る
まつさらな遍路衣装や靈山寺
潜水橋杖を小脇の徒遍路
土佐路へと大灘走る遍路バス



春の徳島には見所が多い。鳴門海峡も春は潮の干満の差が大きく、大渦を巻くことで知られていて、観潮船も賑わう。また鳴門大橋の上から常時観潮することが出来る「渦の道」は、観光名所でもある。

徳島市の中心部を流れる吉野川は水量も豊富で、太平洋へと繋がっている。3月中旬、徳島城址の中央公園では、早咲きの蜂須賀桜が紅濃く咲き誇り見頃を迎える。

街中のあちこちで遍路に出会うことが多くなるのもこの頃である。

梅の里

大内佐奈枝

たたみ来る春潮厚き大洗

春になると潮の色も明るくなり干満の差が激しくなる。押し寄せては大きな干潟を残し引いていく。それを「たたみ来る春潮厚き」と詠んだ。

太平洋を一望する大洗海岸の波音が聞こえてきた。

偕楽園日向も陰も梅盛り

「偕楽園」は日本三名園の一つである。水戸藩九代藩主徳川斉昭によって造園された。

斉昭はすべての生き物が命を紡いでいるのは「陰と陽」「寒と暑」など相反するものが自然の道理にかなって調和を保っているからだと考え、藩士たちの学問の場「弘道館」と民の憩いの場としての「偕楽園」を対の施設として造ったとある。

「偕楽園」には現在約100種3000本の梅の木が植えられ、配置にも「陰と陽」が生かされているそうだが、それゆえに「日向も陰も」の措辞が効いている。

家苞の納豆提げて梅見かな

水戸と言えば梅だけではない。納豆もまた名物として全国に知られている。

この句は二つをうまく詠みこんで一句と成した。

紅梅や維新に散りし殉難士

「弘道館」は幕末に日本の状況を心配する多くの志士に思想的影響を与えた。その中で思い出すのは水戸藩の天狗党の乱である。多くの死者を出したと聞く。「紅梅」が殉難士の思いと無念を想像させる。

虫送り

杉澤 修

虫追ひの空群青に暮れゆけり

稲作とともに生きて来た日本人にとって稲につく虫は悩みの種だった。そうした病害虫を追い払い豊作を願う行事が「虫追ひ」「虫送り」である。主に初夏から秋にかけて行なうが、昨今は過疎化、少子高齢化などによる農業の衰退などで行うところが少なくなっている。

しかし作者の言葉にあるように藤枝の殿地区では現在も連綿と続けられている。筆者も10年ほど前に初めて連れて行って頂いたが、その時の驚きは忘れられない。

18時すぎにようやく陽が落ちてくると、子供たちの松明の火が百本余りの大松明（直径約40センチ、高さ約150センチ）に移されていく。

「空群青に」にその時を待つ静けさが描き出された。

火の粉降る野川を鳴けり秋蛙

燃え盛る大松明の火の粉が川に散る迫力と鄙びた蛙の声との取り合わせにより「虫送り」の景が描出された。

空焦がし田虫送りの果てにけり

一村をけがらせ秋の闇深む

百本余りの大松明の燃え盛る様子は文字通り「空焦がし」である。大松明の火で明るくなった畦道を子供たちが「田の虫おくれ」と鉦の音とともに唱えながら寺まで歩く。寺では火に飛び込んだ虫の供養をして祭りは果てるとなり村は闇に包まれてゆく。「深む」のようにやがて火は煙となり夜風に作者は秋を感じたのであった。

私のこの一句

梁へ渡る脚ぬけさうな木橋かな 久保村淑子

母の住む前橋を息子一家と訪ねた時のこと。孫が魚好きということで母が利根川にかかる「板東梁」へ釣れて行ってくれました。入口では炭火ががんがん焚かれ、鉢巻き姿の男達が真っ赤な顔で鮎を焼いています。始めはたじたじの小3と幼稚園の孫も席につき、塩焼き・田楽・フライ・鮎鮓と次々たいたらげ、お櫃のご飯もすっかり食べ、お店の方もびっくり。川縁の梁の仕掛け見学後、石切をして遊びました。母が亡くなって10年、その時の母の満足そうな顔が目に残ります。

目高の子コップに入れて貰ひきし 島野ひさ

昭和51年春、現在の「俳句文学館」が出来、私たち入会まもない会員も「風」の句会に参加出来るようになりました。まだ俳句の何たるかもわからない頃でした。初めての投句をすませ、後方の席で句会の進行を物珍しげに眺めていると、「風」主宰沢木欣一氏の選句が読み上げられ、その中に私のこの一句がありました。主宰は「俳句はこれで良いのです。素直が一番です」と評してくださいました。私は恥ずかしさに戸惑いながらも幸せでした。私の原点はここにありま

す。以後、何も考えず楽しいだけでまいりました。俳句の仲間に入れていただいた幸せに感謝です

ゆっくりと回る地球や山眠る 三屋英俊

内海良太先生が亡くなられる前の入院中、先生とのやり取りは全てメールとなっていました。そんな中、令和6年12月29日付のメールで、「英俊さんのメの句、気宇壮大で、元気を頂きました」と。12月22日の「新中央句会」で江見悦子主宰に特選でとって頂いた句に目をとめて下さったのだと思います。私の返信メール……「この句、私の中では『ゆっくりと回る地球』にも、『山眠る（春には笑ふ）』にも良太先生が重なっています」と。最後のやり取りは令和7年1月10日。先生は1月26日永久の眠りにつかれました。

家族の絵描いて征けり合歡は実に 桔梗 純

平成15年8月末、信州の吟行会で立ち寄った「無言館」で的一句。館内では涙腺を止めようもなく、その後集合した場所には、大きな合歡の木が緑の実を付けていました。

その夜の句会で、思いがけず岩崎眉乃先生の特選を頂きました。その時求めた画集に、今尚その時の感情が蘇ります。

昭和・平成・令和と生きて、戦中戦後の様々な経験が、今の自由で平和な生活を有難いと、実感させてくれます。この生活を脅かす何事も起きませんようにと祈る昨今です。

子規の写生論の展開（七）

高木良多

（承前）

しかしながら、子規にとって全く予期せざる事態が生じ、子規の写生論のうち、時間の写生についての項目を改めざるを得ないことになるのである。

年譜によれば、子規は明治二十九年、二十九歳の三月、脊椎カリエスと判明、歩行の自由を欠くようになり、病床生活に入り、外界との交渉は断絶、自然を自分の目で視ることができなくなった。

子規の「俳人ヲ戒ムルノ書」の中の一節を挙げると、足ある人は机の上で発句も作れるやうに思へど足なくなりて後どう考へて見ても机の上で発句つくれぬ也 机の上で発句つくれるやうに思ふはいつとはなく見て来たことが机の上へ出る迄のこと也 見て来たことがなくては机の上へ達磨さんも出ぬ也 手づまの名人でも種がなくては手づま出来不申

柿食ふて文学論を草しけり（明治二十九年秋か）

このあと、子規は空間世界を描くことができなくなり、止むを得ず、一人称的な写生俳句という方法での暗模索の世界に入り、その中から、次のような傑作を産み出していった。

小夜時雨の中を上野から根岸へ向かってくる虚子を偲しのび、

小夜時雨上野を虚子の来つ、あらん

また、看病をしている妹の律か母に、降りしきる雪の深さを尋ね、

いくたびも雪の深さを尋ねけり

障子明けよ上野の雪を一目見ん

など、絶体絶命の中から新しい境地を切り開いていったのである。

これらは自分の目で見た物を写生している句とはいえない。空間上の物ではなく、時間ばかりの世界にあつて、自分の心象―時間を写生しているのである。

子規は、そのようないまわの際に立って「時間ばかりを写生することは出来得べきにあらず」とした自分の写生論を突き抜け、時間をも写生することに、自己の写生論を拡幅していったと思う。凄絶せいぜつというよりほかはない。それにしても悲壮感がなく、明るい雰囲気ふんいきが漂っているのは子規の性格からきているともいえるが、美を追求する写生精神が漲みなぎっているからであると思う。

（この稿、了）

『子規・写生―没後百年―』（沢木欣一編 角川書店）より抄出

『万葉集』にたずねる抒情の源流 ③

橋本 清

今回から巻六に入ります。長歌・短歌・旋頭歌、合わせて一六〇首の雑歌を収めた巻です。

若の浦に 潮満ち来れば

渇を無み 葦辺をさして 鶴鳴き渡る (六・九一九)

「若の浦に潮が満ちて来ると、干潟が無くなるので、葦辺を指して鶴の群れが鳴き渡って行く。」

ひたひたと満ちて来る青い潮。その上を甲高い声で鳴き渡って行く白い鳥の群れ。この青と白の鮮やかな対比が、読む者をその風景に引き込みます。そして、そこにみなぎる自然の躍動。これが風景に生命感を与え、心を揺さぶる。神亀元年(724)10月、聖武天皇が紀伊国海部郡の玉津島に行幸した時、従駕した山部赤人が作った歌です。

行幸に従駕した歌人は帝の滞在する仮の御所(離宮)を賛美する歌を作りました。本巻の巻頭には、元正天皇が養老7年(723)5月、吉野離宮に行幸した時、笠金村が作った歌が載っています。

山高み 白木綿花に 落ちたぎつ

滝の河内は 見れど飽かぬかも (六・九〇九)

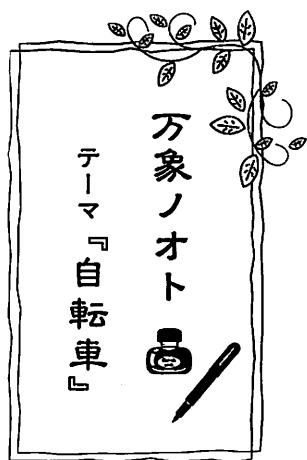
「山が高いので、川の水が白い木綿でこしらえた花のよ

うに、真つ白なしぶきを上げてたぎり落ちる。この滝の河内はいくら見ても見飽きないことだ。」

「滝の河内」は吉野離宮が臨む谷川沿いの地。離宮から見える風景を、「見れど飽かぬかも」と褒め称えることで離宮を讃美しているのです。同じことが表題歌についても言えます。どちらも離宮での宴で披露されたものでしょう。行幸に限らず、旅先で催される宴では、あたかも新築の家の落成を祝うかのように、仮の宿りを祝福する歌を作りました。それがいつしか宿所を讃美するより、その周囲の美景を描写するようになって行く。これが『万葉集』における叙景歌の起源であると、折口信夫は「叙景詩の発生」(全集①)で述べています。

五月雨を集めて涼し最上川 (芭蕉)

『奥の細道』の旅の途次、山形の大石田という最上川の船着場で日和を待っている時、土地の俳人に招かれて一卷の歌仙(36句の連句)を巻きました。これはその発句。亭主の家の座敷から見える風景の快適さを「涼し」と讃えることで、そのもてなしに対する挨拶としています。これも風景の描写がそれに臨んでいる家を讃美する形になっています。芭蕉は後にこの句を『奥の細道』に取り入れましたが、「涼し」を「早し」と改めています。そうすると、増水した大河に対する畏怖の念を込めた叙景句になる。赤人の歌にうかがえるような、躍動する自然に対する驚嘆がここにも現れています。



万象ノオト

テーマ『自転車』

交番での話

千葉 高田みや子

古い話だが、駐輪場に置いた自転車が盗まれ、慌てて交番に駆け込んだ。先客がいて若い男性と中学生だった。漏れ聞く話によると、その男性の自転車を中学生が盗もうとして見つかり、交番に連れて来られたところだった。中学生は、親は仕事で帰宅は夜だと訴えていた。男性が申告しなければ親に連絡することなく警官の説諭で帰されるという。携帯のない時代の話である。お節な私は男性に「私も親ですが、親はどんなことでも子供の事は知りたいものですよ」と。するとその男性は意を決したかのように、親に連絡してくださいと警官に言った。やがて、母親が来て涙を流しながら

男性に謝っていた。私のしたことは果たしてどうだったのか。自転車という交番でのこの話を思い出す。

浜名湖へ

静岡 永田公香

子供たちが成長してからは車の生活になり、自転車に乗ったのは最終的に何時のことだったか？

36年前のこと、夫の友達夫婦と四組で浜名湖に一泊した。弁天島からフラワーパークまで、湖をサイクリングすることになった。5月の湖で魚や貝を探し、子供のように楽しみながら風を切って8人で走った。

しかし宿に着くや「お尻が痛い」誰ともなく悲鳴を上げ始めた。温泉で揉んでも「痛い」あの痛さ。日数をかけ次第に和らいだ。今では笑い話だが、普段乗らない「おいど」にとっては、レンタサイクルはサドルが硬く、電動サイクルもない時代のことだった。

自転車に乗ることがない現在、車だけが「足」になってくれています。年齢的に何時まで運転が出来たらうか？

やわるのじゅんしゃ

東京 平子申奈

自転車を持つてはいますが、乗ることは殆どありません。自転車で行けるくらいの距離は歩く方が好きなので。小学生のさとするは、仕事が忙しくて会えないパパに手紙を書きます。「ぼく、じこんしゃがほしいんだ。」パパから返事が来ます。「さとするの字はらんぼうで、じこんしゃって何だろうって思ったよ」と。

今回何十年ぶりかでの絵本を読み返してみました。「じこんしゃ」だけは憶えていましたが、高度成長時代の家族や子供たち、社会の様子が描かれた物語でした。ゲームもスマホもなかった時代に、一台の自転車は少年にとって親友のような存在となり、苦楽を共にしたのです。私も「じこんしゃ」を走らせてみたくなりました。

自由な世界

武蔵村山 松井宣夫

初めて自転車に乗れるようになった時のことは鮮明に覚えています。どこ

までも走って行けそうに思ったものです。

時は流れ、私はSさんと知り合います。Sさんは元サケマス船団の乗組員で当時のソ連に拿捕、抑留され、3年後に帰国。そんな浦島太郎状態の時に、私は彼と出会ったのです。

シベリアの刑務所に興味があつた私は、根ほり葉ほり聞いたものでした。そのSさんが持っていたのがイタリア製の自転車で、その美しさは言葉では表現できないほどでした。今でも、街中を走るイタリア製のロードバイクを見るたびに、「自由って素晴らしいよ」と言っていたSさんの事を思い出します。

自転車

横浜 柳澤宗正

私は信州の田舎育ちで、小学4年迄は近くの分教場に通い、5年生になると峠を越え浅間温泉にある本校まで片道一里(4km)の道を通いました。中学生になると更に遠くなり、片道6kmを歩いて通学しました。高校は松本市内なので歩くには遠すぎるため

自転車通学でした。登校時は概ね下り坂でしたから楽で、英語やドイツ語の単語を片手に登校したのですが、帰路は逆に漕ぎ通しで大変でした。

それでも往路復路とも通学の女の子たちとの出会いもあり、毎日の自転車通学が楽しかった青春時代を思い出します。

自転車の乗り始めの頃、下り坂を制御できずに田圃へ突っ込んだことや、脚の怪我で兄の自転車に乗せてもらい松本の医者まで通院し、兄達に申し訳ないと思つたことなど、車の無かつた遠い昔の自転車の思い出は尽きることがありません。

自転車の思い出

千葉 松浦陵保

私が自転車に乗り始めたのは小学3年生の時で、大人用の自転車を三角漕ぎから始めた。

車も人氣も無い砂利道で、何度も草叢に突っ込んだり転んだりした後に乗れるようになった。自転車を少し傾けて体重と左右のバランスを取るのが難しかった。

暫くしてサドルに座って走れる様になったが、対向車があると上手く避けることが出来ず、危く轢かれそうになったりもした。

高校入学が決まり、ハンドルがドロップ式の五段変速自転車を買ってくれた。嬉しくて飛び跳ねた。真つ先に父が馴らし運転をしていた。通学の最寄り駅までの10キロを、冬場を除き毎日走り続けた。一度もパンクした記憶が無い。常にピカピカに磨いていた。卒業し上京後は、父の愛車として活躍してくれた。

父と自転車に感謝感謝！

「万象ノオト」投稿募集

▽10月号「エアコン」(6月末日締切)

▽11月号「スマホ」(7月末日締切)

▽長さ 本文 17字×19行以内

▽投稿先

〒417-0861 富士市広見東本町14-14

神田美穂子

巻頭作家（五月号）プロフィール



高^{たか}山^{やま}ひさ子
(那珂川)

末っ子に嫁ぐ末っ子萩日和
平成18年1月号初入選の句。家族との
生活を活写、同6月には三句入選する。

朝市の色も香も濃き蓬餅
春服をふんはり詰めて旅支度
お道具を出したり入れたり入園児
平成24年7月号に4句選として

火花散る道路工事や冴返る
草餅と宝くじ券仏壇に
合格を聞きて旅立つ花の朝
春休みくり返し見るドラえもん
同6月号

高山ひさ子さんの巻頭の知らせは本
当に嬉しい事でした。ひさ子さんは昭
和23年福岡市に生まれ、生家は本屋。
本に囲まれた生活で読書好きな女性に
成長しました。商事会社勤務してそ
こでご主人になる方と巡り合い、三人
の娘さんを授かりましたが、やがてご
主人と死別、お子さんの養育に専念さ
れました。四人のお孫さんとは幼い頃
から朗読会をしていたそうです。
俳句との出会いは平成12年、故井山
幸子さんのお義母と親しくさせていた
だいた御縁で井山さんの芙蓉句会に参
加、平成17年「万象」に入会しました。
稲刈を終へて熟睡の若き婿

熱の子に届く雛のオルゴール
茶道具を前に小さき石雛
春雪の博多に母を見舞ひけり
句会は和やかで、後のお茶会も楽し
いものでした。入会当初からご指導頂
いた井山幸子先生が平成28年3月ご逝
去されました。しばらく空白でしたが
平成29年9月から小林愛子先生の通信
指導を受けています。交代時の会員数
は6、7名ほどでしたが今は3人、個

別にメール他で頑張っています。
令和5年4月号

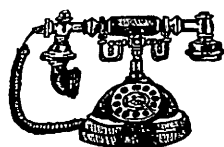
真四角に山茶花垣を整へり
船に乗り歯医者通ひや年の暮
熱々の下仁田葱に肉の味
靴磨き成人式の男の子かな
ひさ子さんはかねてから地域の公民
館の催し物、文化祭にも熱心でした。
音楽教室でのクリスマスコンサートで
は、お手製のチロル風の衣装を身に纏
い堂々とソロを披露。また目の不自由
な方へ市の広報紙などの音声訳のボラ
ンティアに励んでおられます。

アナベルに潜みしちさきみどり蜘蛛
楊桃をジャムにゼリーに雨の音
蟻塚の砂盛り上げて雲はやし
犬の子の膝を離れず日雷
とにかく勉強家で行動力ありの明るい
性格なのでこの度の巻頭に大拍手です。
新しき朱の箸で溶く寒卵
室外機の陰より翔てり寒雀
春宵のAに訊くイタリ語
選挙カー避けて裏道海真白
本人曰く「俳句は永く続けたい」と。
益々のご活躍を!!

(宮田千恵子)

万象作品

江見悦子選



○は佳句に選ばれました。

○掌に載せて錠剤七つ春の宵 那珂川 高山ひさ子

ステップに跳ぶスリッパや春つらら

コンクリートの小さき穴よりすみれ草

筆談の兄のノートや椿落つ

硬券に鉄の凹み春動く 静岡 伊東文恵

二月尽毘沙門天へつづく道

白達磨のどんぐり眼春を呼ぶ

○つちふるや地べたに座る農具売り

手を打てば駆け出す子等よ山笑ふ 伊勢原 山本カツ子

熱の子の粥に添へたる蜆汁

○夫の忌やまんさくの香に年重ね

刈り跡の畔の彩り犬ふぐり

雪道を七色のバスかがやき来 三鷹 高尾早弓

海峡の風に晒して若布干す

一湾を囲む山々木の根明く

○鎧窓大きく開き花ミモザ 那珂 稲嶺有晃

結び目を一つ解けり春の風

春の潮満ち静かなる誕生日

うりずんの光を握る小さき手

○男手の春の夕餉の島豆腐

前山に斑に積もる春の雪

静岡

野崎浩子

山里に恵みの雨よ建国日

○つくしんは軀の籠に溢るるほど

靴底の形くつきり春の泥

○ヨイヤサア都をどりに急ぎ足

白山

朝倉みゆき

ぽかぽかの縁側手には蓬餅

枝渡り山鳥遊ぶ並木道

ほんのりと山の上なる春の虹

札幌

石田 睦

雪割の音で目覚むる日曜日

春時雨煙る道路に人氣なく

古雛や造り酒屋の奥座敷

トルソーの並ぶ作業場春寒し

島崎 洋

○後輩にチェロを引き継ぎ卒業す

日輪の影を透かして春の雪

杉山和廣

老犬へ飛雪斜めに吹きつけり

春の雪マリンスノーの沈むごと

摺り足の音しやりしやりとざらめ雪

杉山 鈴子

科の木の米粒ほどに木の芽張る

白鳥の黒き水かき着水す

月食にかざす手の影ひなの夜

札幌

竹重富子

バスを待つおしやべりに降る春の雪

足音の聞こゆる春のみぞれかな

頬顰る風残雪を溶かしけり

田邊政代

ささくれに薬擦り込む春の宵

バーゲンの花束春の黄の多き

通気孔より囀る賑やかに

土門 一平

春泥の道大通り公園へ

半ドンの昼食雛のちらし鮎

土門 一

啓蟄や長患ひの友の文

春風に吹かれてモネの女立つ

桃の日や息子と酌める残り酒

船橋明美

残る雪めがね曇らせ旅立てる

卒業の制服姿大人びて

春近し靴音ひびくアスファルト

新庄

曾野部礼子

鳴り続く着信音や雪見舞

甕に束ね啓翁桜淡淡と

泥跳ねの固まりごろと春浅し

雪払ひすぐに干さるる帽子かな

大江

安藤桂花

○枝の雪どさりと落ちて陽のゆるむ

仙 台

富田洋子

木の芽雨一氣にふふむ生出ガ森

仙 台

富田洋子

雄勝硯の海にたゆたふ春の水

新潟

齋藤 信

田の隅の小さき畑に黄水仙

新潟

齋藤 信

○春の雲アンパンマンの乳母車

榊原キヨ子

焦点の合はぬ眼鏡や春炬燵

榊原キヨ子

血圧を計るも日課春を待つ

榊原キヨ子

鳥交る獄舎名残の小さき門

榊原キヨ子

冬深し夜更けに家の軋む音

榊原キヨ子

○春の参道既に猫の跡

佐藤幸示

両親の遺影に雪の反射光

佐藤幸示

摘みし手のみどりに染まる草の餅

山田季聰

スマホ置く旅の木の芽の風さやか

山田季聰

ペットロスあふれ切なき恋の猫

山田季聰

○春の水ぼちやぼちや寄する渴の岸

燕

渡辺志ま

残る鴨降りたる鷺と争はず

渡辺志ま

啓蟄や庭搔く熊手新しく

芳賀

福武幸子

だしぬけに庭石盾に福寿草

芳賀

福武幸子

寒牡丹菰を解かれて緋を深む

野遊や空にひろがる子等の声

登り切る古墳の坂や蓬摘む

栃 木

飯塚キミ

伐採の明るき林ちよつとこい

昨夜の雨小道に芹のまきみどり

強東風にあらがふ鷺の峙へと

佐 野

仲山さよ子

梅日和水音たつる稚魚の群

通り雨口遊みつつ雛節る

○春昼の猫まつたりと船簞笥

春北風や声張り上ぐるサツカー子

義本美智江

麦青む散歩コースを二廻り

空青しミモザにそふる手の白き

志 木

汐見克彦

あぜ道の星屑のごといぬふぐり

春一番颯爽と行く伊達眼鏡

草萌や土壘に残る城の跡

森山洋之助

コールベルそつと鳴らして春を待つ

菜の花や「下ノ畑」という畑

春光は介護疲れの妻癒す

新 座

多田英治

山茶花の根元に菊の新芽吹く

身動きのならぬ我が身に春の風

バス停に白水仙の群れてをり 所沢 小橋川和子

白梅の香るアーチに浸りたる

木蓮の空の広さや風そよぐ

春の湾ゆるゆる交じる水脈と水脈 千葉 高田みや子

木の根明く獣の跡の行き交へり

春田打いきつもどりつトラクター

春めくや五枚重ねのパンケーキ 加藤浩子

○開かれし記憶の扉沈丁花

老いて尚美しき正座の雛の客

客の居ぬ茶屋の軒先春寒 成田 宮本うらら

春の海ノルウェー船の浮かびをり

窓際の芹の青さに日差し濃し

期日前投票の列雪催 酒々井 小林あけみ

春浅し爪痛みたるトウシューズ

店先に雛飾れる漁師町 佐倉 新谷八郎

総身のやはらぎ足裏に草萌ゆる

一面の花菜の囲むホスピス棟

○野遊や子はポケットをふくらませ

児を背に籠いっぱいの春野菜 有泉正夫

田楽のこの味うれし秘伝味噌

九条の効きめ薄るる春愁

春寒し成満帰山祝ふ僧 佐倉 杉田富美代

白き空よりしんしんと芝に雪

ひつそりと枝に牡丹の芽の赤し

日と土の温みに抱かれ福寿草 鈴木隆久

追儺会や数多の影とすれ違ふ

さざ波は光となりて春来る

ポストまで借りたる夫の冬帽子 鈴木美根子

○ねぢ捲けば回る踊り子春めけり

赤子の手ひらけばほのと梅一輪 近藤澄子

亡き夫の夢にまた現る春の夜 船橋

道の辺のたんぽぽ元氣もらひけり

仏壇の夫に田楽供へけり 山口秀吉

春の道妻と杖とに助けられ

春風やカーテンそつとふくらませ

鶯や朝のコーヒー豊かにし 鹿毛満子

紫雲英の餌遊具うさぎにやる子かな 柏

友来るとともに白髪の雛祭

草の芽や除草シートの隙間から

○鶯餅どこを抓んで食べやうか 村田由美子

日だまりの斜面にわつと名草の芽

紅梅や空青々と風尖る

立春や下駄箱の上の歩数計

松戸

石川幸子

青空の色犬ふぐりそこかしこ

覚えなき芽の伸び来る植木鉢

稲荷社の赤き鳥居や寒紅梅

仏塔に夕日きらめき春に入る

庭隅の沈丁の香や風に乗り

春めくや種類の増ゆる香辛料

東京

安藤美酒々

水温む伸びはやくなる足の爪

摘草の籠一杯に指染まる

大晦日幼児が鐘をたたくなり

退院す街は師走の色となり

病院は別世界なり年の暮

山茶花の掃きたる後にまた散れり

薄曇新川に梅香り立つ

越前の荒波届く水仙花

誕生日出窓に飾る君子蘭

鶯の声に目覚むる里の家

冴返る町に仕舞屋また一戸

渡部洋子

大場八朗

蕪木静子

北口富栄

シャンソンの尽きぬバースや冬銀河

東京

齊藤孝夫

銀巴里のネオンの消えて冬の月

シャンソンの前振り朗々外は雪

パトカーのサイレン残る春の闇

挨拶の声のはづむや梅開く

二月尽朝はまだかと水ひと口

木々芽吹く林試の森や鴉啼く

蜜を吸ふ目白早来る河津桜

沈丁花散歩の小犬嗅ぎまはる

自転車荷台にのぞく桃の花

雛あられ握りたるまま赤子寝る

○ふんはりと庭木あかるき春の雪

一枝の佗助手折り師を偲ぶ

ほろ苦き遠き思ひ出落のたう

道場の高声響く寒稽古

桜木の枝にはころぶ蕾かな

海猫の渡りて鴉影ひそめ

残りたる黄の一輪の冬さうび

自画像へ春光ほのか無言館

春一番猫の心音高ぶりぬ

鶴田智美

中澤桃子

橋本紀代子

長谷川はるみ

平子甲奈

道造を諳じて今朝春めけり

※道造……詩人・立原道造

春めきてはしやぐ学童校門へ

東京 平澤一光

夕東風に家路を急ぐ襟立てて

公園の古き館に雛飾る

前川 昇

淡雪のサドルの上にこんもりと

雪の朝自転車のあと二本線

残さるる頭の欠けし雪だるま

宮崎正義

あの雲の遥か向かうは雪の街

○寒月やメタセコイアの天辺に

片雲の飛び行く先の冬木立

荒井 仁

楽器庫にチューバ並ぶや春浅き

鬼すぐに逃げ女子校の節分会

春めくや観劇の夜の雨の音

三鷹 南場雅子

雪中花今年も開く土手の道

梅開きほのかな色を見上げたり

空向きてぽとりと落ちし椿かな

府中 竹村晃子

山菜莢やぼんぼん光る黄金色

白壁にミモザの花の影と風

下萌やわづかな土を押し上げて

日野 松原悦子

水草生ふ小川の稚魚の影走る

○野梅咲く村中牛の肥臭ふ

丁寧に道問ふ人や春の雪

冬日和カフェーに響くピアノ曲

青梅

横井一美

屋根の雪幾何学模様に残さるる

溶けかくる氷の破片輝けり

祭典の余韻春めく狭庭かな

横浜

大駒泰子

福豆を栗鼠来て食べてしまひけり

ストープに手をかざしたり投票所

春一番大きく撓ふ竹林

岡 元枝

満開の梅の花びら散らす風

青き空風にミモザの眩しくて

朝の日に雛の調度の金光る

坂本具子

いぬふぐり田水流るる谷戸の晴れ

紅白梅ままごとの莫塵広げあり

庭園の幹のせりだす樫紅葉

柴田雅春

愛猫の死にたちあへり九月尽

もくれんの幹のまはり木葉散る

核家族妻を相手の福笑

長野高朋

若水を供へ決意を新たにす

戦の妻や厨に水仕事

紅梅の枝の先まで空真青

茅ヶ崎

久保田富士子

○掛軸の遺墨に変はり松の花

ルツコラの白和へ供へ入り彼岸

啓蟄や峡の水音ひびきたる

松田

古谷悠紀子

新聞の届く気配や霜の朝

三人の子に守り札初天神

雲母摺の墨字の滲み春時雨

静岡

飯田優子

櫛の瘤に浸み入る春の雨

本尊の雪洞温し小糠雨

○読みかけのままの三島や目借り時

早春やごみ出しといふ小旅行

糠取りを今夜も一人臘月

軽トラの出店の並ぶ冬の市

千体のさるはば繋ぐ吊し雛

白き富士黒き愛鷹冬日和

徳川の産衣の鶴や春ともし

新調のミシンの音や寒明くる

○春シヨール隠れて開く恋みくじ

餅花の花の零るる十日かな

地吹雪や村に一つの信号機

杉田義則

奥川裕美

海野俊彦

石川直樹

○鳥屋跡の朽ちし柱と酒の瓶

掌の雛の後れ毛そつと撫づ

静岡

杉山巳代

御神酒提げ参る漢や春驟雨

浅春の雨の音聞く茶室かな

城の西ふんはり浮かぶ春の月

高井明子

春風と共に幼の跳ね回る

花明り水琴窟に耳澄ませ

腰伸ばし翁眺むる春の雲

田中秀幸

診察を待つ間の句集春の昼

散髪の帰宅を急ぐ春一番

冬満月空の蒼さの際立てり

筑地裕子

水涸れてダム湖の底に役場跡

猫食める庭に落ちたる年の豆

落ち着きし母の寝顔に肩蒲団

内藤允昭

転移なしと主治医の言葉春兆す

新装の病室にある古暦

風を待ち黄金を垂るる杉の花

中澤祐一

老梅の蕾の青き木末かな

春めくや絵馬のあふるる天神社

○花ミモザ町屋づくりの齒科医院

永田公香

撫牛の眼つぶらや春うらら

金沢

北野陽子

春の日や米寿の友の背筋伸ぶ

静岡

長谷川洋子

地下道を足早に行く建国祭

將軍の槌の玩具の春の色

福島章友

○ 点滴の半ば過ぎたり鳥雲に

○ 古草の揺らぎて風の通る道

春の雪旅の餅屋へあと半里

焼津

小梁洋子

線香の煙にまぎれて風花来

苔ほのとふくらむ朝や黄蝶来る

掛川

鈴木美由紀

ほこほことわきたつ庭や黄水仙

さらさらと水集めをり雪解川

雨粒を抱きて零るる寒桜

冴返る水口の鯉動かざる

豊崎

鈴木裕一

凍蝶の雨戸に引かれ出でにけり

春浅しバス待つ帽子深々と

凍解の田を一筋に耕運機

金沢

上野富貴子

輪島塗の椀を重ねて雑煮餅

大雪や備蓄食品点検し

除雪車に感謝感謝の手を合はす

桜咲き犀川沿ひに並び立つ

金沢

北野陽子

春風にこはれてゐたる間垣かな

利休忌の梅の香りに酔ひしかな

歳時記の暦にぎはふ弥生かな

飾りつつ心満ちたる雛の壇

ポストまでひなたを歩く四温かな

○ 切株にうすもの渦春立てり

野水仙岬の風に逆らはず

閉校の親子で歌ふ卒業歌

薄氷を粉粉に踏み登校児

靴跡のふはりと残る春の土

閉園のメロディ流れ冬堇

田上ナツ子

春告草鯉一匹ののつたりと

卯辰山春告鳥の声ひとつ

工房の大窓ごしに枝垂梅

バック入りの七草刻み粥炊ける

かほく

能任康子

小豆粥無病息災念じつつ

成人式をのこの衣裳仮装めく

猫柳ほうけて常の川辺かな

白山

鶴尾正江

ピクニック夫手作りの杖をつき

雛飾り美しきに命惜しみたり

蠟梅のかをり齋庭にほしいまま

敦賀

川口和代

道の辺に照る山吹や道祖神

お茶漬は野の香ただよふ木の芽漬

万物の動く気配や山笑ふ

奈良

町田すみれ

○お通路のじやこ天分かつ道の駅

囀の重なりあへる森の朝

読みかけのページ進まず葛湯かな

徳島

林 早苗

小さき手を合はす読経や冬の堂

百歳の歌に相の手冬うらら

好物は寒餅と言ふ時の人

山本晴美

木瓜蕾み退院祝ふ夕餉かな

淡雪のたちまち消えてしまひけり

階下より珈琲の香や春来る

山本瑤子

春夕焼水面煌めく吉野川

傘となり碑おほふ枝垂梅

表札は夫の手作り梅開く

小松島

田上幸子

○鮎上る架け替へられし潜水橋

参拝客気付かず帰る牡丹の芽

千代紙の小箱に貰ふ雛あられ

三好

内田孝子

春眠や夢の中まで句会して

○春めくやゆつくり動く象の耳

菜の花や父を乗せたる車椅子

三好

細田良子

内海に島の数多や春霞

琴電の車両はレトロ麦青む

菜の花の色どこまでも河川敷

福岡

園田清子

一番茶八女の山河の香りあり

バス降りて蓬摘みつみ回り道

旅立ちの涙ひとすぢ冬の虹

鶴田輝代

りくりゆうペア冬季五輪の金の舞

盆栽の紅梅匂ふ夕べかな

法堂の天上冴ゆる双龍図

太宰府

美山留唯

弓を引く袴凜凜しく成人の日

寒波来る響きうたてきジェット音

はくれんの凜と満開過疎の村

門川

請関ゆかり

初虹や日に三本の路線バス

○春の海眩しく遠く友逝きぬ

出稼ぎの父の声待つ黒電話

国富

山口孝治

出稼ぎの父の広ぐる土産かな

立春や男先生縄回す

○豚つぶし火又神^{カシ}浄め旧正月 那 高嶺容道

断捨離の遅々と二月の終はりけり

蒼天へ一花掲ぐる火炎木

桜餅をさな覚えの盆点前 宜野 宜野 頭

○猫通るコザ裏町の花イペー

舟留めの旗や二月風^{ニシツツナカジマ}廻り

春雪にたまげ夫呼ぶ朝の庭 ベルン 森尾 舞

受験子の溢れ静かなる電車

鬼子母神参り春夜のハイボール

〈お詫びと訂正〉

5月号62ページ、町田すみれ様の句に誤りがありました。
お詫びして訂正します

(誤) 雲しまく川面ネオンに染まりけり

(正) 雪しまく川面ネオンに染まりけり

〈新会員のご紹介〉

3月の加入者です。

佐藤麻利子様 北海道札幌市

山本絢子様 東京都中野区

最近の名句集を探る

池田瑠那「心柱」

座談会

司会・筑紫磐井

庄田ひろふみ「聖河」

内村恭子

西生ゆかり「パブリック」

山田耕司

高橋睦郎特別作品40句

●今月の華

藤井稜雨／三宅やよい

●好評連載

伊野孝行

●巻頭三句

井上康明／田中亚美

人はなぜ風雲を描くのか

岩田 奎／稲田眸子

俳壇ランドスケープ

矢島鈴子／田中由子

句の手触り、俳人の響き

●俳句と短歌の10作比較

藤本夕衣＋種市由紀子

俳句へのまなざし

●人々作品

福島たけし句集『聖絵』

俳句のレトリック

●今月のハイライト

「火星」「顔」「波」

てのひらの江戸

「鳩の子」「梓」

―古典語を旅する―

●作品16句

浅井陽子／江崎紀和子

俳句よもやま話

手拝裕任／福田若之

石井隆司

矢須恵由

山本 潔

一望百里

俳句四季
Haiku Shiki

2026年6月号

<https://www.tokyoshiki.co.jp/> 東京四季出版

〒189-0013 東村山市栄町2-22-28 ☎042-399-2180

北から南から

兼六園周辺

金沢 中條睦子

兼六園は、水戸の偕楽園、岡山の後楽園とならぶ日本三名園の一つ。江戸時代の大名庭園として、加賀藩の歴代藩主により長い歳月をかけて形作られてきた。

金沢の中心部に位置し、四季折々の美しさを楽しませられる。犀川の辰巳用水から引く水で、いくつかの池を結ぶ曲水の優しい流れがあり、築山、林泉周遊式庭園として美しく管理されている。

春は周囲のソメイヨシノの桜並木、初夏にかけても、園に残る桜の銘木を楽しむことが出来る。夏は、曲水の涼しげな流れを縁取る燕子花の古代紫、躑躅、半夏生の白の群生が目を楽しませてくれる。秋は柔らかな緑の苔庭に映える楓の紅葉が美しい。冬の初め、11月に入ると雪吊り作業が始まる。特に、園の中央の唐崎の松の雪吊り作業は有名で、松の天辺から投げ下ろされる縄の先を、下で待つ数人の園丁が一本ずつ枝に縄を結び付けてゆく、そんなりんご吊りと呼ばれる作業は金沢の冬の風物詩になっている。雪に覆われた雪景色は、静かな景観として味わうことが出来る。

兼六園の梅林は、20種の梅が集められ広大なエリアで、種類によって開花の遅速があるので、1月下旬から3月中旬にかけて、白梅、紅梅の見ごろを楽しむことが出来る。梅林の下を流れる曲水も、梅の美しさを引き立て格別の風情を醸し

出している。

亀甲橋くぐりて速し花筏 今越みち子
水辺より大地目覚むる梅一輪 中條睦子

兼六園周辺は、県立能楽堂、歴史博物館、県立美術館、本多蔵品館、国立工芸館などが立ち並ぶ芸術の森となっていて、落ち着いた雰囲気の中を散策することが出来る。

なかんづく古九谷の黄の涼しさよ 沢木欣一

古九谷の深むらさきも雁の頃 細見綾子

県立美術館の常設展のコーナーでは、掲句に観られる古九谷の展示を鑑賞することが出来る。

国立工芸館は、近現代の工芸・デザインを専門とする美術館。工芸文化の発展拠点として作品や資料の収集保管に努めており、所蔵作品展や企画展を開催しているのも見どころ。

県立美術館の裏から急坂を下りると、世界的仏教哲学者にちなむ鈴木大拙館へ出ることが出来る。「玄関棟」「展示棟」「思索空間棟」「水鏡の庭」などの回廊を結ぶことで、来館者それぞれが鈴木大拙について知り、学び、考えることが意図されているのが見どころである。

兼六園へは、金沢駅から周遊バスが出ている。また、早朝開園は季節により、4時から6時半ころまで無料開放している。朝の新鮮な空気の中で味わう兼六園もお勧めである。

万象作品の佳句

江見悦子

掌に載せて錠剤七つ春の宵 那覇 高山ひさ子

一説「錠剤七つ」に驚いたが、季語「春の宵」で安心した。毎日飲むことになっている処方薬なのだろう。手の平に載せてみると7錠、こんなに飲んでいるのかと呆れている作者。恐らく深刻な病の薬ではないのだろうが、加齢と共に増える薬の種類と量には同情し、共感する。微苦笑を誘う俳諧味のある句。「春の宵」が秀逸。

つちふるや地べたに座る農具売り 静岡 伊藤文恵

以前、静岡県富士市の「毘沙門天大祭」だるま市に伺い、静岡の皆さんと吟行した思い出がある。境内の一角には鋤や鍬、作物の苗などが並び、畏まて売られていた。掲句は、黄砂の降る中、農具を筵に置いて客を待っている農具売りの、自然と共に生きる情景を詠んだ。「地べたに座る」が写生。

夫の忌やまんさくの香に年重ね 伊勢原 山本カツ子

今日はご主人の命日、ちょうど庭の金縷梅が咲き始めている。ご主人が逝かれた時もこの花が香っていた。自分もあの時から随分と年月を経てきたものだ、と慨嘆している作者の夫恋いの句。金縷梅の香りは、鎮魂の香りなのだ。

鎧窓大きく開き花ミモザ 三鷹 高尾早弓

鎧窓は、幅の狭い羽根板を斜めに並べた鎧戸を設置した窓

のこと、洋風建築に作られることが多い。明治末期に渡来したミモザはマメ科アカシア属の植物で、鮮やかな黄色の花が群がって咲く様がまぶしい。掲句のミモザと鎧窓の取合せはいかにも似つかわしい。この鎧窓の向こうには真つ青な海が広がっているのだろうか。心を全開にし、早春の息吹を感じている作者ののびやかさが伝わってくる。

男手の春の夕餉の島豆腐 那覇 稲嶺有晃

「男手」が面白い。いつもの女手に代わって今日は男が台所に立っている。夕餉の食材は先ず沖縄の食卓に欠かせない島豆腐、これを肴に泡盛を楽しもうかなどと思いつながら皿小鉢を並べている男。まだ薄明るい春の夕方である。穏やかな島の明け暮れの一餉を詠んだ。

つくしんぼ媼の籠に溢るるほど 静岡 野崎浩子

野に出て土筆を摘んできた媼の手籠には山盛りのつくしんぼ。媼の毎年の仕事なのだろう。これから袴をとるのが一仕事だが、佃煮にするのか、卵とじか、春の香り一杯の食卓が見える。「溢るるほど」と6音になるが、「溢るほど」には無理がある。終止形ではなく連体形で「ほど」に続けたいのだ。

ヨイイヤサア都をどりに急ぎ足 白山 朝倉みゆき

「都をどり」は、毎年4月1日から30日まで京都の祇園甲部歌舞練場で催される春の踊り。「ヨイイヤサー」は踊りの掛け声。祇園を目指して自然と急ぎ足となる作者。威勢の良いい「ヨイイヤサー」の掛け声を期待して心が弾む。春の京都が一層華やぐ時である。

後輩にチエロを引き継ぎ卒業す 札幌 島崎 洋

部活動で一緒だった後輩とも別れる卒業の季節となった。「チエロを引き継ぎ」から、管弦楽部の後輩だろうか。中学校か高校か、切磋琢磨した3年間の思い出と共に、使っていたチエロを手渡しして後輩にあとを託す。学園ドラマの一場面のようにいささか面映ゆいが、新たな世界へ出発しようとする青年の思いと決意を素直に表現している。

春の水ばちやばちや寄する渇の岸 燕 渡辺 志ま

「ばちやばちや」の擬音語が何とも春めいて可愛らしい。渇の岸辺に屈み、水に手を入れてばちやばちやした感触を楽しんでいる作者の姿を想像した。岸辺に寄せる波もばちやばちや。「春の波」ではなく、「春の水」としたところに春がやってくるという作者の実感がある。

開かれし記憶の扉 沈丁花 千葉 加藤 浩子

沈丁花の香りに様々な過去の記憶が蘇る。それを記憶の扉が開かれた、と詠んだ。古今和歌集の歌「五月待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする」（詠人知らず）にも詠われているように、多くの人の共感を呼ぶ句である。

ねぢ捲けば回る踊り子春めけり 佐倉 鈴木美根子

棚に置かれたままの踊り子のオルゴールの埃を久しぶりに払い、ゆつくりと螺子を捲く。どんな曲が流れたのか、曲に乗って踊り子が回り始める。立春を過ぎてしばらく経ち、より春らしさを感じるようになった頃である。

寒月やメタセコイアの天辺に 東京 宮崎 正義
季節を問わず、メタセコイアに出合っていると嬉しくなる。空に

向かって真つすぐに伸びた均整の取れた樹形は、遠くからでも近くからでも仰いでいて飽きない。掲句の季語は「寒月」、冬の月よりも冷たく冴えた月が、すっかり葉を落としたメタセコイアの天辺にかかっている。透徹した空間に、月もメタセコイアもそぎ落とされた美しさを放っている。

読みかけのままの三島や目借り時 静岡 石川 直樹

春も深まる頃、眠くてたまらない時がある。蛙が人の目を借りてゆくから、という俗説に基づく俳諧味のある季語が「目借り時」。三島由紀夫の小説を読んでいた作者、急な眠気にページを開けたまま寝落ちしてしまった。目覚めてから続きを読んだのかどうか。三島と目借り時の取合せが面白い。

切株にうすもの渦春立てり 金沢 菅原 雅子

新しい切株なのだろう。切株の年輪をうす桃色の渦に見立てた句。雨上がりのしっとりとした切株と想いたい。立春の日の瑞々しさを詠んだ感覚的な句。

猫通るコザ裏町の花イペー 富野 宜野 顕

コザは旧コザ市の通称で、今は沖縄市の中心市街地となっている場所。嘉手納基地に隣接しアメリカ軍人が利用する商業・娯楽街として発展してきた、音楽・エイサーの街とも。

この句、「コザ裏町」の昼が舞台か。表通りの繁華街を一歩入った裏町は人影もなく静か。猫がのんびりと路地から路地へ抜けていく。ブラジルを原産地とするイペーの花は南国の黄色い花。鮮やかな黄色が沖繩に春を告げる。イペーの花を明とすればもう一方に暗を感じるの、沖縄の複雑な歴史を象徴する「コザ裏町」という言葉だと思う。

新中央句会報 (3月通信句会)

令和8年3月20日(日) 締切 (投句者34名)

江見 悦子 選

落椿刀 架立ちたる 跼り口 長谷川 信也
 沢水の中に 葉先や 水草生ふ 奥 太雅
 八十の 坂は 難儀や 鳥疊 奥 太雅
 羊齒萌ゆる 曲がりくねりの 谷戸の道 大久保 進
 トロンボーン 伸ばして 引いて 春うらら 榎本文代
 花こぶし 空青くして 海は 黙 星野 信子
 ひよつとこの 見上ぐる おかめ 桜かな 柳澤宗正
 高層の開かずの 窓や 鳥帰る 大久保 進

④ 地虫 出づ ス克蘭ブルの 交差点 大久保 進

スクランブルとあるからには 都会の 交差点か。足許をふつと虫が動き、おやこんな場所にもという 新鮮な驚き。信号を早足で渡る人波にも、地虫と同じく春がやって来た。

中村 千久 選

冴返る一人にあまる 粥炊いて 三木 豊子
 春一番 大きく 撓ふ 竹林 岡 元枝
 ひそめきを 覗けば 雛の夜の 宴 三屋 英俊
 卒業子イヤホン 分けて 木のベンチ 加賀 葉子
 園庭に チョークの 線路 風光る 神田美穂子
 トロンボーン 伸ばして 引いて 春うらら 榎本文代

空色の 家に ミモザの花の 庭 砂地 宏子
 仏彫る 無言の 父子 かげろへり 吉中 愛子
 ままごとの 記憶の 匂ひ 春の 草 阿部 澄

④ 鞆鞭を 漕げ イカロスの ごと 高く 砂地 宏子

春空に向けて 大きく ブランコを 漕ぐ 子どもに、蜜蠟で 固めた 羽根を 付けて 迷宮から 脱出した ギリシャ 神話の イカロスに 重ね合わせた 句 また がりの 一句。墜落 しない とい い けれど。

榎本 文代 選

冴返る一人にあまる 粥炊いて 三木 豊子
 メトロより 抜くる 改札 春寒し 長谷川 信也
 パティシエの 帽子 高々 花ミモザ 一由 久美子
 蕎麦 食べに いく ぐる 暖簾や 吊し 雛 南雲 秀子
 園庭に チョークの 線路 風光る 神田美穂子
 本郷の 床屋 訪ねる 啄木 忌 名和 政代
 空色の 家に ミモザの花の 庭 砂地 宏子
 啓蟄や 童謡 好きの 集まれり 松浦 陵保
 髪染めの 斑多かりし 山笑ふ 安藤 美酒々

④ 三月の 光満ちたる 梨畑 内田 郁代

「三月」とあるから、剪定を終えた 梨畑 のようである。整った 枝先は、明るい 日ざしに 包まれて 輝いている。少し ずつ 光の 濃く なって くる 春の 季節 感が 感じ られる 句。

内田 郁代 選

うらうらと照りてふらここ日和なる
 剪定の女庭師のやさしき眼
 花冷えやピアノの蓋の指のあと
 トロンボーン伸ばして引いて春うらら
 姿見を少し離れて春の帯
 夕まぐれ白梅の白残りたり
 少女らの終はらぬ会話春の宵
 膝当てに春泥厚き庭師かな
 大試験リュックの中のにぎり飯

中村千久
 小梁洋子
 神田美穂子
 榎本文代
 三木豊子
 砂地宏子
 松井宣夫
 阿部 澄
 神田美穂子

⑧ 園庭にチヨークの線路風光る 神田美穂子

暖かい日差しに溢れる園庭の真中に線路が描いてある。しかも、色取り取りに。優しく温かい景色が見えてくる。少ない言葉の有効に働かせてある。無理なく春を詠みこんだ良い句です。

神田美穂子 選

牙返る一人にあまる粥炊いて
 トロンボーン伸ばして引いて春うらら
 花こぶし空青くして海は黙
 水仙の影のささやく水のおも
 しやぼん玉上がりて歪み整ひぬ
 佐保姫の十二単のやうな山
 背に受く春一番のもろ手突き
 ままごとの記憶の匂ひ春の草
 囁へひつくり返す玩具箱

三木豊子
 榎本文代
 星野信子
 中村千久
 三屋英俊
 奥太雅
 大久保進
 阿部 澄
 榎本文代

⑨ 煙草苗植う黒潮の風の島 丸本祥夫
 かつて瀬戸内海沿いの香川県に在住の時、近所に煙草畑があった。根柢はないが、黒潮の風の島が妙に煙草畑にピッタリに思われ魅かれた句。

三屋 英俊 選

田子の浦潮目変はりて霞立つ
 遠くとはどこまでをいふ朧の夜
 園庭にチヨークの線路風光る
 トロンボーン伸ばして引いて春うらら
 復活祭稽古九人の四重唱
 紅殻の褪せて茶屋街春寒し
 膝当てに春泥厚き庭師かな
 魚氷に上り溪谷に猿の声
 大試験リュックの中のにぎり飯

久留島規子
 桑原優美子
 神田美穂子
 榎本文代
 安藤美酒々
 久留島規子
 阿部 澄
 沢辺たけし
 神田美穂子

⑩ はるかなる女神の島や春がすみ 中村千久

田心姫神鎮座の宗像・沖ノ島を思った。神宿る遙拝の島。玄界灘のその孤島に「春がすみ」。景が雄大。鑑賞するにつれて霞の奥に誘いこまれ、「記紀」の世界にまで遊ばせてくれた。

今後の新中央句会の予定

▽6月28日(日) 大妻女子大学 H棟 313室 13時より

▽7月は夏休みとさせていただきます。

「万象」句会一覧① (2026年6月現在)

	句会名	開催日時	会 場	指 導	幹 事
1	万象・新中央	第4日・1時 (変更あり)	大妻女子大学	悦子・文代・ 千久	久留島・南雲・ 小池 080-1297-6113
2	札幌	第1土・1時	道民活動センター	林 陽子	落合裕子 080-6098-3822
3	札幌北	第1水・12時半	篠路コミュニティーセンター	岡本敬子	中鉢弘一 011-598-6571
4	札幌北(吟行)	第3水	吟行地	岡本敬子	中鉢弘一 011-598-6571
5	札幌清風	第3日・11時	札幌真如院	大内和憲	大内マキ子 011-707-2259
6	札幌円山	第2火・6時	円山商店	濱谷和代	北浦詩子 090-9085-4391
7	新潟	第1日・1時	新潟市中央公民館	高橋ひろ	高野松風 070-2828-7962
8	河交	第3日・1時	新潟中地区公民館	高野松風	齋藤 信 090-1691-9859
9	佐野・みかも	第4火・1時	佐野城山記念館	亀田・加藤	阿部・義本 0283-23-0747
10	風車	第2土・1時	佐野城山記念館	大木 茂	芝宮留美子 0283-25-2155
11	晶	第3水・1時半	佐野城山記念館	亀田やす子	茂木弘子 090-4456-2204
12	新樹	第1金・1時半	佐野城山記念館	増田幸子	上岡佳子 0282-62-5138
13	皐月・すずかけ	第1火・1時	佐野城山記念館	増田幸子	売野 緑 0283-25-2109
14	佐野合同吟行	毎月25日	吟行地	亀田やす子	芝宮留美子 0283-25-2155
15	二荒	第1木・1時半	宇都宮市中央公民館	阿久津勝利	阿久津勝利 028-662-8020
16	芳賀	第2土・1時半	芳賀町民会館	阿久津勝利 大村かし子	福武幸子 028-678-0175
17	志木木犀	第2日・1時	志木ニュータウン東武集会所	中村千久	板垣陽子 048-465-7217
18	浦和	第3日・1時	大妻女子大学	中村千久	砂地宏子 0422-47-3402
19	千葉	第2土・1時	船橋市勤労市民センター	たけし・郁代・ 英俊	古川・田中 04-7163-3962
20	つばき	第3日・1時	船橋市勤労市民センター	内田郁代	久保村淑子 047-462-3711
21	小金原	第2 第4金・1時半	小金原老人福祉センター	沢辺たけし	寿多映子 047-343-1788
22	成田	第1日・1時	都賀コミュニティーセンター	奥 太雅 大内佐奈枝	塗木翠雲 090-5753-9873
23	うすみ	第3月・1時	白井ニコロ会館	三屋英俊 横川良子	横川良子 043-487-2625
24	都賀	第2日・1時	都賀コミュニティーセンター	三屋英俊 大月玲子	高田みや子 090-7011-6144

「万象」句会一覧② (2026年6月現在)

	句会名	開催日時	会 場	指 導	幹 事
25	柏	第2日・12時	アミューズ柏	山本とく江 内田郁代	内田郁代 047-163-6810
26	柏吟行	隔月 曜日不定	吟行地	山本とく江 内田郁代	当番制
27	東京俳句スクール	第2火・1時	高井戸地域区民センター	江見悦子	吉中・藤田 044-986-1667
28	成増けやき	第2木・1時	板橋区立アクトホール	長谷川信也	長谷川信也 03-3931-6200
29	杜の会	第1水・1時	吟行地	南雲秀子	南雲秀子 042-946-5536
30	小松川	第1日・10時	松葉会館	江見悦子	長谷川・前川 03-3685-8754
31	横 浜	第2日・1時	かながわLプラザ	柳澤宗正	大久保 進 044-333-1054
32	横浜洪福寺	第3金・正午	ほどがや地区センター	小林愛子	榎本文代 045-953-4246
33	保土ヶ谷	第2木・正午	西谷地区センター	小林愛子	星野信子 080-6505-0666
34	あさひ	第4火・正午	上白根コミュニティセンター	榎本文代	後藤晴子 045-954-1519
35	金沢文庫	第3日・1時	谷津坂会館	大橋雅子	加藤和子 045-773-6961
36	戸塚品濃	第2月・1時	品濃クラブ	恒川清爾	恒川清爾 0467-32-6578
37	ミモザ	第1木・10時半	榎本文代宅	榎本文代	榎本文代 045-953-4246
38	川 崎	第1日・1時	教育文化会館	柳澤宗正 新妻奎子	新妻奎子 044-573-9249
39	伊勢原	第4水・10時	中央公民館	吉中愛子 佐藤和子	佐藤和子 0463-93-3979
40	静岡青葉	第1日・9時半	大里生涯学習センター	神田美穂子	藤本節子 054-282-7970
41	静岡 葵	第1日・1時半	大里生涯学習センター	萩野加壽子	石川裕子 054-282-8577
42	静岡大里	第1水・1時	大里生涯学習センター	藤原千代子	藤原千代子 054-286-3719
43	静岡木曜	第3木・1時半	大里生涯学習センター	大長文昭	大長文昭 054-282-1063
44	小判草	第1日・9時半	静岡市番町市民センター	小川明美	伊東文恵 080-4172-5194
45	登呂通信	月1回	(通信)	本多ひとみ	小川明美 054-283-6233
46	風の谷	第2金・1時半	北部生涯学習センター	小川明美	鈴木美由紀 090-9175-8598
47	静岡放送俳句講座	最終土・10時	SBS 学苑	小川明美	本多ひとみ 054-335-5107
48	井 川	第4金・3時	井川学習交流館	大村峰子	宮崎知恵美 054-260-2355

「万象」句会一覧③（2026年6月現在）

	句会名	開催日時	会 場	指 導	幹 事
49	満点会吟行	随時	吟行地	小川明美	松永博子 090-6331-5071
50	時雨窓	第3水・1時半	東部生涯学習センター	小川明美	杉田義則 054-261-2245
51	青田風	第4水・1時半	東部生涯学習センター	小川明美	長谷川洋子
52	小 春	第3金・18時半	健康文化交流館「来・て・こ」	小川明美	松永博子 090-6331-5071
53	なでしこ	第2水・10時	番町市民センター	望月敏男	田中秀幸 054-252-5295
54	季節風同人	4/8・12月 第1土9時半	大里生涯学習センター	神田美穂子	当番制
55	季節風吟行	年2回	吟行地	神田美穂子	当番制
56	富士花野	最終金・9時半	富士駅北まちづくりセンター	神田美穂子	縣 昌司 0545-63-5697
57	赤ペン	第1土・1時半	遊亀庵	荻野加壽子	荻野加壽子 054-262-2486
58	堅香子(通信)	毎月15日		神田美穂子	藤本節子 054-282-7970
59	このはな	第2土・3時	古民家「このはな」	杉澤 修	杉澤 修 090-7959-4828
60	あかね	第1木・1時	四高記念館	井村・谷渡	伊藤・松井 076-239-2103
61	白 菊	第4水・1時	西光寺	中條睦子	伊藤美音子 076-239-2103
62	ふれあい	第1 第3水・1時半	コミュニティーセンター金ヶ崎	谷渡末枝	谷渡末枝 0767-68-2187
63	敦 賀	第2金・1時	北公民館	鶴田勝子 中村 優	中川雅月 090-2038-2444
64	まつかぜ	第4火・1時	北公民館	中村 優 鶴田勝子	中川雅月 090-2038-2444
65	徳 島	第4土・2時	万福寺	福島せいぎ	福島吉美 088-625-1500
66	芙 蓉	第1水・1時	男女共同参画センターアミカス	小林愛子 (後日選)	宮田千恵子 092-861-4605
67	長崎鳴滝	第3日・1時	鳴滝西部公民館	丸本祥夫	永田美知子 095-822-8624
68	宮崎ひむか	第1土・11時	ホテルマリックスラグーン	中山 宣 中山芳教	鳥居達史 090-9406-8807
69	真南風	第1土・2時	ふう	前田貴美子	前田貴美子 098-834-7086
70	ふうせん	第2土・2時	ふう	前田貴美子	前田貴美子 098-834-7086
71	インシャラー	第4日・3時	インシャラー	前田貴美子	前田貴美子 098-834-7086
72	ふうの吟行	第3日	朝から吟行後ふうにて句会	前田貴美子	前田貴美子 098-834-7086

* 記載事項に変更のあった場合は、総務の久留島（080-1297-6113）までご連絡ください。
 次回は12月号に掲載します。

ルビーの小函 (6月号)

「同人作品」「万象作品」に掲載された漢字表記でルビを振らなかったもののうちから、読みにてこずりそうなものを拾ってあります。作品鑑賞の参考にしてください。太字は季語ですから歳時記で確かめてください。読みは現代仮名遣いにしてあります。

(編集部・校正担当)

- 7 熟寝(うまい)
- 8 魚氷に上る(うおひにのぼる)
鈍色(にびいろ)
霜ぐもり(よなぐもり)
三十三才(みそさざい)
秀(ほ)
- 11 微酔(ほろよい)
項(うなじ)
- 12 鋭声(とごえ)
空木(うつぎ)
- 13 隠沼(こもりぬ)
拳つて(こぞって)
- 14 巢塔(すとう)
縹(はなだ)
潦(にわたずみ)
涅槃西風(ねはんにし)
- 15 銜へ(くわえ)
紅殻(べんがら)
斑雪(はだれゆき)
- 16 託ち(かこち)
水草生ふ(みぐさおう)
接骨木の花(にわたこのはな)
- 17 戦世(いくさゆ/いくさよ)
- 18 嫋やぐ(たおやぐ)
藁ゆる(ひこばゆる)
- 21 抽斗(ひきだし)
擡ぐ(もたぐ)
- 22 莖立(くくたち)
杣(そま)
- 23 殿(しんがり)
潰ゆ(ついゆ)

- 23 家移り(やうつり)
草鞋(わらじ)
神馬(しんめ/じんめ)
- 24 水分石(みくまりいし)
- 26 春北風(はるならい)
艾草(もぐさ)
- 27 岬(さき)
黙す(もだす)
求肥(ぎゅうひ)
- 28 朱欒(ザボン)
- 29 塗るる(まみるる)
潮(うしお)
- 30 一期田(いっきだ)
金鉦(きんしょう)
- 37 鶴(こうのとりの)
- 46 科の木(しなのき)
鬬る(なぶる)
雄勝硯(おかつすずり)
塙(ねぐら)
- 春北風(はるきた)
- 47 鳥交る(とりさかる)
- 48 紫雲英田(げんげだ)
- 49 仕舞屋(しもたや)
- 50 野梅(やばい)
鞆(あかぎれ)
- 51 愛鷹(あしたか) *静岡県の名
産衣(うぶぎ)
鳥屋跡(とやあと)
- 52 斎庭(ゆにわ)
碑(いしぶみ)
- 54 緋寒桜(ひかんざくら)

北 南 西 東

消 息 等

江見悦子主宰・小林愛子名誉顧問の句

「くぢら」 4月号に

父の丈はるかに超えて御慶かな 悦子
生き得たりうすがみを解く花びら餅 愛子

「初蝶」 4月号に

ハワイコナ挽く間に過ぐる初時雨 悦子

「たかな」 4月号に

栗剥くや思ひ出したるバスイード 悦子

第1回真砂女俳句大賞（令和8年「俳壇」4月号発表）

神野紗希 選 佳作

青銅の麒麟の欠伸蝶生る 砂地宏子

第27回NHK全国俳句大会 題詠「口」

星野高士 選 秀作 岸本尚毅 選 佳作

口開けて獣の顔や鮭のぼる 成瀬真紀子

達磨市吟行

2月24日 日本三大達磨市の一つ富士市

吉原の毘沙門天達磨市を八名で吟行した。

境内には各地の達磨屋さんが所狭しと店を

並べ、隣接して植木市、農具市、瀬戸物市

もあり、多くの人で賑わっていた。7句投

句（内1句を富士山を詠んだ句）で句会。

（神田美穂子）

達磨屋のとなり手相見春浅し 縣 昌司

植木市隅に一軒瀬戸物屋 稲葉恭枝

紅椿はぐれて昏き冠木門 杉澤 修

海の色少し濁らせ春暑し 加山ひさ子

納め達磨に残る目力春埃 荻野加壽子

農具市地べたにひろぐ鉄と罌 一由久美子

強面の両手に達磨二月尽 久留島規子

岳麓の真澄の空や緑立つ 神田美穂子

日航俳句会 築地本願寺吟行

3月27日 7名にて築地本願寺の合同慕

に眠る故内海良太名誉主宰の彼岸詣りと月

例のバイブオルガンコンサートを楽しみに

行ってきました。その際、本願寺境内のベ

ンチで「ミニ青空句会」を開催しました。

良太師に似し横顔や風信子 安藤美酒々

花の寺オルガンの音の満ち満ちて 平子申奈

彼岸参恩師好みし風信香 大月玲子

花曇銘板たどる合同墓 真木朝実

師を偲ぶオルガンの音や花の昼 松浦陵保

遠足の児の通り抜く本願寺 奥 太雅

法話聴く良太師眠る彼岸寺 塗木翠雲

俳人協会主催 第37回花と緑の吟行会

4月8日、横浜の関内ホールで吟行会が

行われた。吟行地は横浜港周辺で300人

を超える参加者があった。会は能村研三理

事長の挨拶で始まり佐怒賀直美氏の「松本

旭の花の句」と題する講演のあと5名の選

者の特選句、入選句の発表と選評があった。

（神奈川支部）

西山睦 特選

朝桜客船飛鳥の窓洗ふ 榎本文代

望月周 特選 小川軽舟 選

春日傘大棧橋にたたみけり 榎本文代

井上弘美 選

清明や廟に紙銭の煙りぬ 三宅芳枝

第45回「時雨忌」全国俳句大会 作品募集

投句 2句1組千円 締切 7月15日

（兼題 芭蕉を偲ぶ句、または今年のテ

マ「音」1句と四季雑詠1句）

第39回「村上鬼城賞」作品募集

作品 30句三千円 締切 6月5日

石田波郷記念「はこべら」俳句大会

投句 2句1組千円 締切 12月10日

「波郷を偲ぶ句」または八月発表の今年の

兼題、テーマ句より1句・四季雑詠 1句

・2種類の作品募集について、各支部に資

料を送りました。

・又、ホームページを参照して下さい。

（報・編集部）

064-0808

札幌市中央区

南八条西15-1-5-904

万象作品投句係行

110円切手を
貼ってください

氏 名	住 所

〈通信欄〉

編集後記

▽ホルムズ海峡を巡る問題が世界経済を混乱の渦に巻き込み、収拾の見通しが立たない。社会性俳句の旗手だった沢木欣一ならこれをどう詠んだだろう。俳句月刊誌として親しまれていた『俳句界』が4月号で途絶えた。時代は混沌としている。

(千久)

▽昨夕、近所の知人から朝掘りの大きな筍を頂いた。久々に大鍋を取り出して、添えられた米糠と一緒に茹で、そのまま一晩置いた。大きかった筍も半分ほどになったが、シャキシャキの爽やかな味を堪能した。旬の食べ物に季節の移ろいを教えられた。(規子)

▽千葉県布施にあるKEIHOOKUというスーパ―がお気に入りである。店内は少し薄暗く、客足もまばら、棚はどちらかと言えば空気が目立つ。だが、何故か心地よい。都心のスーパ―とは違った安心感がある。83円で南天の苗木を買った。

(清晴)

▽「二季化」という言葉を耳にする端的にいうと、「夏が延びている」ということ。過去42年間で、夏が3週間ほど延び、冬は延びも縮みもせず、春と秋が縮まっている。今年4月気象庁から正式採用された酷暑日、今年も暑い夏を迎えるようです。

(久美子)

▽先日、「かつしか風物誌」という本を見つけました。著者は亀井鳴瀬。大正、昭和と地元の俳句活動に尽力した人物。神職の家に生まれ、先祖は將軍吉宗から「小松菜」の名を賜った家柄だとか。吉宗から膳の野菜を聞かれて答えられず「こまつたな」と言ったのが「小松菜」に聞こえたという家に伝わる話を書いています。

(宣夫)

▽先日、認知症にかかわる話が身辺でいろいろ起きている。友人だった親戚だったりするが、そういう本人も怪しいものだ。そうなったら言ってもなどと言いついてるが、面と向かって指摘されたら、受け入れられるか、自信がない。

(みや子)

会員を募ります

会員は左記の会費(誌代)を前納していただきます。

一年分 一二、〇〇〇円

会費の納入は左記の振替をご利用ください。新会員は必ずその旨明記。

郵便振替口座 00230・0・103581

万象俳句会

住所変更届・退会届等については、必ず封書又は葉書にて、左記へご連絡願います。

〒284-0015 四街道市千代田1-7-10 塗木翠雲

万象 六月号

第二十五巻 第三号
通巻 第二九一号

令和八年六月一日 発行

主宰 江見悦子

発行人 江見悦子

編集人 中村千久

〒168-00072

東京都杉並区高井戸東一-31-61 603

万象発行所

☎〇三六三二四一五七九六

「万象」創刊二十五周年記念

第二十四回「万象俳句賞」作品募集

万象俳句賞は毎年一回広く作品を募り優秀作を表彰、「万象」俳句の向上・発展に資するものです。多数の応募を期待いたします。

作品

一人20句 未発表新作に限る

原稿用紙など一枚に縦書きとし、一通（コピー可）提出

原稿の冒頭に題名を、末尾に住所・姓号を明記

封筒に「万象俳句賞応募」と朱書のこと

メールでの応募の場合は、応募原稿と必要事項を添付してお送りください

選者

江見悦子 小林愛子 中村千久 福島せいぎ 柳澤宗正

中條睦子 前田貴美子 榎本文代 神田美穂子 沢辺たけし

応募資格

「万象」同人・会員に限る

締切

令和8年6月末日到着分までを有効とする

宛先

〒二七〇一〇一一六 千葉県流山市中野久木五六三一一

穂苅照子（万象俳句賞事務局）

〈メール〉6845ubwn@jcom.zaq.ne.jp 〈電話〉〇九〇一二四二七一五一七五

入賞発表

「万象」10月号 全国俳句大会で作品一席に万象俳句賞を贈る